

## 第1回関西総合防衛セミナー（大阪市）

日 時：平成24年7月24日（火） 1300～1750  
場 所：大阪国際会議場 12階 特別会議場  
講 師：(株)独立総合研究所代表取締役社長・兼・首席研究員 青山繁晴氏  
川崎重工業(株)顧問、前海上幕僚長・海将 赤星慶治氏  
防衛大学校教授、元防衛庁情報本部長・海将 太田文雄氏  
防衛研究所北東アジア研究室主任研究官 飯田将史氏  
前海上自衛隊中央システム通信隊司令・1等海佐 竹本三保氏  
(大阪府立高等学校長)

議事概要：

### 【司会】

それでは、ただいまより、第1回関西総合防衛セミナーを開催いたします。まず、主催者を代表いたしまして、近畿中部防衛局長・田淵眞二よりご挨拶させていただきます。

### 【近畿中部防衛局長挨拶】

皆さま、こんにちは。本日はお暑い中、かくも多くの方々が、私ども第1回目の関西総合防衛セミナーにおいでいただきまして誠にありがとうございます。

ただいまご紹介に預かりました、私、近畿中部防衛局の局長をやっております田淵でございます。よろしくお願ひします。

本日、ここに関西の第1回目、関西総合防衛セミナーということで開催することになりました。その前に、近畿中部防衛局について若干ピーアールをさせていただきたいと思ひます。

近畿中部防衛局というのは、大阪府並びに京都府、この2府、そのほかに10県を所掌しておりまして、これは、中部地区、近畿地区、また東海地区、北陸地区です。こういうところを全て管轄しているということでございまして、この中でどういう仕事をやっているかと申しますと、防衛施設、とりわけ、当管内には飛行場なり、港湾施設、駐屯地、演習場、多々ございます。こういうものが安定的に運用できるというところで、私ども縁の下の力持ち的ところで、様々な施策をやっているという状況でございます。

例を挙げますと、小松、これは石川県にありますけれども、航空自衛隊、ここでは騒音、当然飛行機が飛ばば騒音が出ます。そのための騒音の障害を防止するための防音工事をやったりとか、また、防衛施設にはたくさんの施設がございまして、この建設工事をやったりとか、また、頻度はそうないんですけども、管内の自衛隊施設を使いまして、米軍との共同訓練、こういうものをやります。こういう際に、地元との調整、こういう仕事をやったり、また、今回のセミナーみたいに防衛政策について広く国民の方々に周知、又ご理解していただくということでセミナーをやったり、また民放のFM放送、こういう

ものに定期的に出演して様々な活動を行っているという状況でございます。

今回の関西総合防衛セミナー、この広報活動の一環として開くわけなんですけれども、皆さんご案内のとおり、関西エリアは、大阪、京都並びに神戸、こういうところの非常にいわゆるメガシティと言われる地方の中心になる都市がございます。そういう中で歴史的にも非常に深いわけがございますけれども、いわば、我が国の第2の首都圏に次ぐ経済・政治等の中心的な立場になると。こういう位置にありながら、実は、私様々な講演活動を行っている中で、こういう声をお聞きしました、地元の方から。主に産業界の方からいろいろなお話を伺いました。

これはどういうことかと申しますと、関西エリアでは、防衛に関しての発信が東京に比べると少ないのではないかと。もう少し積極的にやってもらいたいという話を沢山の方から機会ある毎に伺いまして、これでは良くないということで、せっかく様々、ビジネス界、また産業界、官界の方々、また、大学の方々、そういう種々各界の方々がいらっしゃる中で、そういう機会を設けなかったということについて、私ども深く反省しているところでございます。これは何とかしなくてはいけないということで、今までセミナーは、18回ほどやってきたんですけれども、今回19回目を開催するにあたって、わが局独自の存在意義、いわゆるレーゾン・デートルをしっかりとさせようということで、今回は防衛の総合的な、あらゆるテーマをここに結集しまして、皆様方にご案内、ご説明していただくと。これも防衛省だけではなくて、内外から高い見識をお持ちの方々、優れた識見を持たれた講師をお呼びして、これで皆様方と色々な議論をさせていただければと思っております。

ここに出てないんですけど、今回のセミナーは、「関西で考える海洋国家日本の安全保障」ということをサブタイトルにしております。このサブタイトルにした理由は、今回、大阪で開くということで水の都・大阪ということが1つ、また7月16日は海の日にあたるということで、その1週間後に開催するということが1つ、また、最近の皆様も新聞、マスコミ等でお知りのとおり、尖閣諸島を含めて、我が国における南西諸島の様々な問題、また、東シナ海における海洋の様々な問題、これはもう国際的にも海洋の安全保障というのは、非常に関心が高うございます。

こういうものを契機にしまして、今回は海をテーマとして、また、海洋ということを一つのテーマの軸にしまして、このセミナーを開催しようということになりました。

講師につきましては、まず特別講演ということで、皆様既にテレビ等でご存じの独立総合研究所の代表取締役社長でございます、青山繁晴先生に特別講演を行っていただくということになっております。先生、非常にお忙しい方でございますけれども、私どものセミナーの趣旨をご説明したうえで、その趣旨に賛同していただいて、非常に厳しい時間の中で時間を割いていただき、今回こういう講義を承ってもらったということについて、非常に感謝しております。

また、この特別講演の後に、セミナーとしまして、3部構成でやらさせていただきます。

まず、第1部はどういうものかと申しますと、海上自衛隊、これは創設60周年に今年にあたるということでございますので、これをテーマとしまして、前海上幕僚長の海将でございます、赤星慶治様をお招きしまして、海上自衛隊60年の軌跡と展望という話をし

ていただきます。

また、第2部では、海洋と安全保障ということで、これはお二方お招きしております、まず1つ目は、防衛大学の教授でございまして、元防衛庁の情報本部長、海将でございます太田文雄様。また、もう1つは、防衛研究所の北東アジア研究室の主任研究官でございます飯田将史様。この方から中国の海洋進出とその背景というものについて、それぞれお話していただくということになっております。

最後に第3部でございますけれども、安全保障と人づくりというところで、女性の方でございますけれども、前海上自衛隊の中央システム通信隊の司令、1等海佐でやめられまして、現在は、大阪府立の狭山高等学校の校長をされている竹本三保様。この方を講師にお招きしまして、それぞれお話をさせていただく。これは「海上防衛の中核から人づくりの現場へ」というテーマでご講話願うことになっております。

それぞれの講師の方々是非常にご多忙の中、今回のセミナーに講師として受諾していただいたということについて、深く感謝申し上げます。また、今回のセミナーにあたりましては、地元の関西経済連合会、大阪商工会議所及び関西経済同友会をはじめとして、防衛省内の関係機関、団体等も含め、様々なご支援・ご協力を賜ったことについて、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

このセミナーは、休憩を入れますと約5時間という非常に長丁場になりますので、中にはお疲れになる方もいらっしゃると思いますが、せっかくの機会でございますので、ごゆっくり最後までご聴講いただければ幸いです。

最後になりますが、本セミナーを機会にしまして、今後とも一層国の安全保障、そして防衛省・自衛隊の活動についてご理解を賜れば、私としては幸いです。本日は誠にありがとうございます。よろしく申し上げます。

#### 【司会】

近畿中部防衛局長からの主催者挨拶でございました。

申し遅れましたが、私は、本日の司会進行を担当させていただきます近畿中部防衛局企画部地方調整課長の小山と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これより特別講演に入らせていただきます。

特別講演の講師は、株式会社独立総合研究所代表取締役社長・兼・首席研究員・青山繁晴先生です。

ここで先生のご経歴を誠に簡単で失礼でございますが、ご紹介させていただきます。

先生は、昭和27年神戸市でお生まれになり、早稲田大学政経学部をご卒業後、共同通信社にお勤めになり、いくつものスクープ記事を書かれました。

共同通信社をお辞めになったあとは、三菱総合研究所に迎えられ、安全保障・外交から金融・経済まで包括する国家戦略の立案に携わられました。

2002年春、日本で初めての独立系シンクタンクとして「独立総合研究所」を設立され、代表取締役社長・兼・首席研究員に就任されました。その後のご活躍は皆様ご承知のとおりで、講演や執筆活動のほか、作家としてもご活躍されておられます。

このように、先生は幅広い活動を展開しておられ、安全保障問題についても活発なご発言をされておられますが、何よりも皆様ご承知のように、長く関西でもご活躍され、特にテレビ番組へのご出演などで、私ども関西在住の者にとっては、日頃から親しみ深い存在でもございます。

このような青山先生に、今回、海洋国家日本の安全保障をテーマとしました第1回目の関西総合防衛セミナーをこの大阪で開催するにあたりまして、特別にご講演いただくことは誠に意義深いのではないかと考え、無理を承知でお願い申し上げたところ、快くお引き受けいただきましたことは、私ども主催者にとりまして望外の幸せで、誠に感謝にたえないところでございます。

本日のご演題は「海の祖国は甦る」でございます。

会場の皆様、どうぞ先生のご講演をじっくりとお聴きください。

それでは、青山先生、どうぞよろしく申し上げます。

**【榊独立総合研究所代表取締役社長・兼・首席研究員 青山繁晴氏】**

皆さんこんにちは、よくぞお集まり頂きました。まず何よりも、この関西の地に於いて第1回関西総合防衛セミナーが行われることを高く評価したいと思います。

今、「高く評価する」と堅い言い方をしましたが、ニコニコしているのでお分かりのように…テレビでは何時も怒っているように見えるでしょう？ふだんはそうじゃないんで、今日は本当に嬉しく思っています。

日本の防衛を皆さんとご一緒に考えるという、こういう機会があれば寝ないでも日程をあけて来ますから、今後もこの皆さんの志と共に、こういう会が続くことを心から願います。

実は、不肖わたしの講演というのは、一番短くて2時間半なんです。長いと実際に6時間連続で講演したりしているんです。今日はそれを45分でまとめなきゃいけないので、さっきから悩んでいたところです。

そして今日は、この後のメンバーのお話をこそ是非たっぷり聞いていただきたい。例えば、わたしのすぐ後には、赤星前海上幕僚長…ここに座っていらっしゃいますが、はい、ちょっと拍手して下さい。赤星前海上幕僚長、国際社会では退役海軍大将、それも海軍のトップとして退役された方ですから、本当にその国の国民の尊敬を集める存在です。国際社会では赤星さんはあくまで退役海軍大将であって、しかも過去の人ではなくて、ついこないだまで海上幕僚長をされていましたから、赤星さんのお話も同じ45分なんですけれども、皆さんご自身も是非お聞きになりたいと思います。その後の講師のかたがたも今日はほんとうに充実しています。教育がいかに人を創るか、国を造るか、国を左右するかを皆さん実感されていると思いますが、赤星さんのあとに講演なさる太田さんは、今、防衛大学校で現役の自衛官を育てていらっしゃいます。どんな育て方なのか、皆さん、たいへんにご関心だと思います。その後の飯田さんは、皆さんが一番心配されている尖閣諸島を含め、中国との海での闘（せめ）ぎ合いについて客観的にお話をされる。そして最後には竹本さんという女性です。なんと前海軍大佐ですね。日本では一等海佐という不可思議な

言い方をしますが、国際社会では海軍大佐です。女性で海軍大佐にまでなって、今、学校の校長をなさっている。素晴らしいですね。ですから、最後の竹本さんのお話まで、これから5時間の長丁場になるそうですけれども、まさか、わたしの話が終わったら帰ったりしないで下さいね。しっかり最後まで、日本国民の志として聞いて頂きたいと思います。

では、話を進めて行きたいんですけども、まずこのレジュメを見て頂けますか。あっ、赤星さんはレジュメをお持ちじゃない。じゃあ、わたしのを差し上げます。皆さん大丈夫ですか。お持ちでない方はいらっしやいませんか。

はい。大丈夫ですね。レジュメの1枚目をめくって頂くと…ちょっと待って下さい。マイクの調子が悪いですね。じゃあもうこれ切ります。今、マイクを切っちゃいました。後ろの人、聞こえますか。はい。じゃあマイク無しでやりましょう。

レジュメを見て頂くと、本文は実質、1ページになっています。例えば、6時間連続でやる時には、これは、わたしたちの独立総合研究所が自主開催する「独立講演会」と言うんですけど、この大阪でも何度もやっています。その時はこのレジュメが13ページあるんです。今日は、幾ら何でも45分の講演会で13ページのレジュメっていうのは、やり過ぎだから、今日は1ページにしましたが、しかしレジュメの原則、つまり書き方はまったく同じです。

ちょっと皆さん、レジュメの本文を見て頂くと、レジュメにしては一点おかしな点、レジュメは本来こうであるはずはないという点がありますね。

はい、マスクしている若者どうですか。このレジュメを見て頂くとレジュメにしては変わった点が一点あるんですが、はい如何ですか。

(来場者： 全部疑問形になっていますね。)

はい、ちょっと拍手して下さい。あなたと握手です。ありがとね。別に打合せをしていたわけじゃなくて、今、目線があった方にお聞きしましたらズバリ正解頂いたんで嬉しいです。

レジュメというのは、本来、結論を簡潔に纏(まと)めてあるものを言うんですよね。…マイクなしの生声ですから、聞こえますか、後ろの方、大丈夫ですか。ぼくの声、聞こえますね。はい、では続けます。

レジュメというのは、本来、結論を簡潔に書いてあるものですが、見て頂くと、結論は一つも書いてないんです。このレジュメのうち、結論が書いてあるのは、表紙のところに演題が書いてありますね、ここだけです。

今日の演題は、『海の祖国は甦る』。ここだけは結論が書いてあります。あとは全て、先程の若者にお答え頂いたとおり、疑問形、質問形になっています。そして、レジュメが13ページあるときも全部、疑問形、質問形にしてあるんです。

それはどうしてかという、こういう講演会であれ、関西テレビなどのテレビ放送であれラジオであれ、ぼくにとっては本職じゃないんです。わたしは20年、共同通信の記者をやりました。その後は、ほんとうは実務家です。例えば原子力委員会の原子力防護専門部会の専門委員を今もしておりますが(註 この講演の3か月後、平成24年10月に原子力防護専門部会が解散)、それはどういう仕事かという、評論などではなくて実務で

す。原発は自然災害だけじゃなくてテロにも弱い。それなのに電力会社も政府もそのリスクを国民に知らせることなく、良い点だけを言ってきたのです。原子力委員会は、委員は基本的に政府の指示を受けねばなりません、専門部会の専門委員というのは政府の言うことを聞く立場じゃなくて、命令を受ける立場じゃなくて、政府の政策のここが間違っている、原発のここが危ないから直すべきだと問題提起する立場です。

3. 11は自然災害ですけれども、あの自然災害において、実は北朝鮮の工作部隊も含めてテロリストたちに原発の弱点というものを見せてしまった。それは、わたしの新たな大きな課題でもあります。十数年前から、すなわち9. 11同時多発テロが起きる前から、わたしは政府に対して「丸腰のガードマンではなく、武装した警官隊を、原発に常駐させるべきだ」と提案しました。これは、スウェーデン、ドイツ、フランス、イギリス、韓国、アメリカの原発を自費で実際に訪れ、各国の情報機関を含む政府、警察、軍との信頼関係に基づいて、テロ対策と防護体制を機密事項にまで踏み込んで調べ尽くした上で、日本に合う警備体制を、政府に提案しました。その後、日本の原発は24時間、武装警官隊が軽機関銃を持って守ってるんです。世界で日本だけです。

だから、弱いところばかりマスメディアで喧伝されるけれど、実は世界で最も進んだ防護体制をとってきたんです。これはテレビではほとんど申しません。何故かというわたし達がやった仕事だからです。自慢話と受け取られるのが嫌だからです。今後もテレビでは言いません。こういうセミナーであれば、目を見ながら話すことができますから、誤解が少ないと思うので、お話しています。

実はわたしの仕事っていうのは本来これが仕事です。つまり、実務家です。それなのにどうして、こういう講演会とかテレビ、ラジオに顔を出すかといえば、このレジュメにあるとおり、皆さんと一緒に考えたいからです。

すべてを問いかけの形にしているのは、もはや右も左もなく、まっすぐ真ん中から、わたしたちのたったひとつの祖国を一緒に考え直したいからです。冷戦が終わったのは1989年です。世界では、右翼だ左翼だという話は、基本的にはそこで終わったのです。もう一度申しますが、右左じゃなくて真っ直ぐ真ん中から、わたしたちの祖国を根っこから見直しませんかという問いかけだけが、ぼくの講演であり、それは講演時間が45分であっても、6時間であっても同じであり、テレビ・ラジオでも同じです。

そして、問いかけというのは、本質的にはただ一点だけです。わたし達のたった一つの祖国は、今から67年前に一度だけ戦争に敗けました。古事記・日本書紀によれば今年で建国2672年、仮に古事記・日本書紀に神話が含まれているとしても、事実として2千年を確実に超える歴史のなかで、ただ一度の敗戦です。

2千年を超える長い歴史を持っている国家というのは、実は日本国以外ありません。こう言うと、「いや、ラーメンのCMでは中国4千年の歴史と言っている」と思うひともいるでしょう。そして、ぼくはこういう仕事ですから、例えば北京で中国人民解放軍の将軍たちと議論することがありますが、彼らは「我が中国は6千年の歴史だ」と、決まって言うんです。ラーメンよりいつの間にか2千年増えている。わたし達は、それは事実じゃないってことを知っている証人です。例えば、鎌倉時代に元寇がありました。寇っていう字

は、侵略者、invader という意味ですが、元っていう意味はどういう意味ですか？

その通り、元っていうのはモンゴルって意味ですよ。あのとき中国軍と朝鮮軍と蒙古軍が侵略してきました。中韓は先の大戦をめぐって侵略戦争と言い立てるけれども、鎌倉時代なら侵略してもいいということはありません。鎌倉時代の日本も間違いなく主権国家であり、生きていたのも現代と同じ日本民族です。たとえば、韓国の愚かな一部の国会議員が「韓国領だ」と言っている対馬では、この朝鮮・高麗軍を含めた侵略軍が非戦闘員の日本の漁民や農民まで虐殺し、さらには生きたまま男も女も手の甲に穴を開けて紐か縄で船の横に吊るし、苦しめ抜いた上で奴隷・戦利品にしてしまった。日蓮聖人の生々しい書簡に、これが記されています。自国の領土なら、なぜ、そんなことをするのですか。古くから日本領だったことは間違いのないのに、言いがかりを付けている。なぜ言いがかりを付けられるのか。日本が自らいつまでも「敗戦国」と思い込んでいることも、その理由のひとつです。日本の敗戦は、1952年4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効して、日本が独立と主権を回復したときに、国際法からしてすでに終わっています。

話を戻しますと、元寇で日本を侵略しようとした朝鮮・高麗軍も中国軍も、そのときモンゴル軍に支配されていたのです。

つまり、あのとき中国はいったん滅んでいました。あるいは最近でいうと、日本国家の青春時代であった明治を考えると、明治の海軍が立ち向かった清国の海軍は皆おさげ髪ですね。将軍から水兵に至るまで。漢人の習慣として男性がおさげ髪にすることはありません。あれは異民族の習慣を押しつけられていたんですね。支配していたのは、女真人です。あの時も中国は滅んでいたんですね。

中国の悪口を言っているんじゃなくて、長い歴史と言っている中国も本当は、他の諸国と同じく何度も戦争に負けて、異民族に支配されて、滅んでいるということです。日本国だけは、世界の主要国で唯一ずっと滅ばないで一つの国が続いてきた国です。それはわたし達の実は誇りではありますが、同時にわたし達の弱点です。なぜかと言えば、勝ったときじゃなくて負けたときにこそどうやって御先祖から受け継いだ大切な伝統を壊さずに育んでいくのかということを、一度も、勉強、練習、訓練する機会が無かったからです。中国も朝鮮半島の人々も、あるいはヨーロッパ諸国も負けたり勝ったり、その繰り返しの歴史です。

だから同じ敗戦国のドイツ、同じ戦争で同じ相手に負けたドイツを考えていただくと、ドイツには自衛隊がありますか。ありませんね。ドイツ連邦軍です。ドイツ語で言うと Bundeswehr、連邦軍以外に訳しようがない。自衛隊ではなく国軍です。なぜ、日本だけが自衛隊でなければならないのか。これは自衛隊の諸君の問題ではなくて、ここにいるわたし自身を含めた、わたし達の側、すなわち日本国の唯一の主人公である主権者の問題です。戦争に負けたら、なぜ陸海空軍を持っちゃいけないんですか。憲法についていろんな御意見があるのは承知しています。しかし、例えば自衛隊であれば、陸上自衛隊の特殊部隊が、今日この瞬間も千葉県習志野市で、例えば、食べ物がないことを想定して、蛇や蛙や蜥蜴を捕まえて食べたりします。皮を剥いて火を加えて。彼らは好きでやっているのではない。それは、わたし達日本国民の許しができれば、すぐに朝鮮半島に行って、わたし達と同

じ有権者である主権者である拉致被害者の国民を救出するためにも、訓練しているのです。わたし達は戦争に負けたからといって、自国民を北朝鮮ごとき破綻国家に奪われたまま何故30年40年と黙っていなければいけないのか、なぜ取り返しに行っちゃいけないのか、ということを実直に真ん中から問い直しませんかというのが、このレジュメの問いかけなんです。もう一度申しますが、日本国民が愚かで同じ国民を救出しないんじゃないんで、わたし達は敗けた経験がなかったから、勝った時じゃなくて、負けた時にこそどうやって守るべきを貫き通すのかということを知らずに来た。拉致被害者の方々を最後の一人まで取り返すためにも、わたし達の祖国を、日本を、真っ直ぐ真ん中から、国際法に則って見直しませんか。この国際法によれば、自国民を奪われて助けに行くのは戦争じゃない。ましてや侵略じゃない。自国民の正当な救出活動です。そのように拉致問題を考えれば、真犯人は、去年12月に亡くなった金正日総書記とその命令で動いた工作員達、真犯人は彼らだけど、その犯人達が動ける環境を作ったのは、実はわたし達自身ではないか、ぼくを含めて主権者じゃないかということが分かってきます。そのことを一緒にの立場で、右とか左とか、保守とかリベラルとかじゃなくて、同じ日本国民としてこの国の唯一の主人公として、考え直しませんか。主人公が、ぼくらしかないんだったら、最終責任者も、ぼくらしかないんです。自分が主人公なのに最後の責任だけ総理とかおそれながら天皇陛下に預けるわけにはいかないんです。ぼくらが最後の責任者ですから。わたし達が拉致被害者を取り返し、二度と拉致事件を生まない祖国にして子々孫々に渡す、その最終責任もまた、わたし達の両肩に乗ってるんです。今日いろんなお考えの方がいらっしゃるでしょうが、より上の次元として、そういうことがあるというのを、このレジュメを通して問いかけたいのです。

そしてですね、今日は時間があと5時間と30分しかありませんから…本当は朝5時までこのままやりたいのですが、赤星さんを初めとする皆さんの話を聞いて頂きたいから、あと30分ですが、今日の海の本題に入りますと、改めてレジュメを見て下さい。レジュメの2ページを見て下さい。その一番冒頭のところの細長い四角の中に「わたしたちは本当の日本を知っているか」と書きました。わたし達が学校で教わってきた日本というのはどういう国ですか。今日は思ったより若い方もいらっしゃる。わたしの先輩の方もいらっしゃる。しかし、そういう世代に関係なく、受けてきた学校教育は同じですよ。敗戦後の教育は全部同じです。一言で言えば、日本は戦争に負けたんだ、負けた国だからこうでなきゃいけないという教育です。もう一つ、日本は戦争に負けた弱い国である上に資源がない国だと、だから勝ったアメリカの言うとおりに資源を買わなきゃいけないという教育でもあります。例えば今日の会場の立派な明かりを見て頂くと、今、関西でも原発は僅か2つしか原子炉が動いていませんから、この電気の大半は、石油と天然ガスで作っているんですよ、この会場も。今、マイク使うのは止めましたが、マイクの電源もそうやって作っているんですよ。しかし、そのままずっと行くなら、日本はいつまでも本当の独立を達成出来ないんじゃないでしょうか。エネルギーが民族と国家の基本です。それを中国も韓国も知っているからこそ、尖閣諸島や竹島の本当は、島そのものより海底の資源を取りに来ている。ロシアも本当は海底資源が最大の目的で、今、北方領土を手放さないん



です。これはあとでもう一度申しますが、それを考えると、本当は原子力の本来の志というのは、せめても独立に近い資源・エネルギーを持たなければならないということだったんです。原子力発電も、ウランを買わなきゃいけません、ウランは世界中にありますから、アメリカの支配を受けにくいんです。それだったら、当然、電力会社も関電であれ東電であれ電力会社は、そして政府も、わたし達国民に対して「原子力はとてもリスクがある。放射性物質を原子炉の中に抱えている以上は災害でもテロでも事故でも、それが起きてしまったら大変なことになるリスクがある。しかし、同時に独立を支えているエネルギーでもある。それを選びますか。それともやっぱりリスクを避けることを優先して日本が仮にアメリカの言うことを聞き続け、外国から高い石油や天然ガスを買うことを認めますか。どっちですか」ということを国民に問うべきだった。何故かというわたし達が主人公ですから。それが、原子力政策の本当の誤りなんです。しかし、話を戻すと、元々、エネルギーというのはそれぐらい重い意味があります。わたし達は敗戦後の教育で、日本は戦争に負けたんだから海外からエネルギーも買わなきゃいけない。その時にアメリカが、中東の石油や天然ガスを、ちゃんと買えるようにしてくれるだけで有難いと思えと教え込まれてきた。それは、未だに日本では常識ですが、皆さんこのレジュメを見て頂くと、「わたしたちは本当の日本を知っているか」という問いかけがあり、その後に「日本は、ほんとうに資源小国か」という問いかけがありますね。皆さん、今日の話は、ぼくだけは知ってたという話は一切しないんです。わたしも普通に日本の小中高、そして大学は、よせばいいのに慶応、早稲田の両方行ってるんです。一人で早慶戦やって父親に勘当されたんですが、日本でたっぷり学校教育を受けました。そのために、ぼくも、日本は戦争に負けた国で資源のない国だから、アメリカの言うことをきかなきゃいけないと思って育ったんです。ところが、一歩海外に出て行ったら、仕事で出て行ったら、世界の常識はまるで違うんです。それがレジュメの次に書いてあります。次に書いてあることは、「アメリカ、中国、韓国、インドといった諸国は日本を資源小国とみているか」という問いかけです。こういう国々を挙げたのは偶然ではなくて、実際にわたしや、あるいは独立総合研究所の自然科学部長である青山千春博士をはじめとする研究員が、資源とエネルギーに関する国際学会に行くと、アメリカ、中国、韓国、インドといった国の学者・研究者と議論をすると、日本の資源の話がたくさん出て来るんです。例えば、一番最近の具体的なことを言えば、レジュメの次です。そこに書いてある「2011年7月」の国際学会は、すなわち去年の夏ですね。ちょうど1年前に、イギリスのスコットランドの首都エディンバラで、国際ガスハイドレート学会というのが開かれました。これは3年に一度しかやらないのですが、その時はぼくが、作業員以外では初めて福島第一原発の構内に入ってから、まだ3ヶ月しか経っていない時点でした。当時、菅政権がぼくを逮捕しようとしていました。もちろん、福島第一原発の吉田昌郎所長の正式な許可を得て構内に入ったのに逮捕しようとしていたのです。この日本国は凄いなあと思うのは、どんな組織でも良心的な人、良心派が必ずいらっしやることです。菅政権の平野達男さんという、今の復興担当大臣が、その時は原子力委員会担当の副大臣だったのですが、この人が中心になって、ぼくを逮捕しようとして、逮捕しろということを警察組織に命じて、警察組織の良心派がそれを断ったんです。一番

最初にぼくが知ったのは、ある日曜日の午後に、警察組織の高官がぼくに電話をしてきて、「青山さん、あなたを逮捕しろと官邸が言ってきたよ」と、おっしゃいました。ぼくは、「いつですか」と聞いたんです。なぜなら、警察の側にいつも言っているのは「日本の警察は、特に権力に弱い」ということです。これも敗戦後の日本国のあり方と深い関係があります。日本は戦争に初めて負けた後、国軍が自衛隊になっただけではなくて、警察も、国家警察が消滅したんです。国家の警察がないと、テロとか大きな災害に立ち向かえません。しかし日本では「戦前の特高警察が悪かった」と、そこに全部責任を押しつけて、警察もまた自衛隊と同じように、国際社会と違って、自治体の警察しかありません。大阪府警や警視庁をはじめ、各都道府県の警察しかありませんから、知事の言うことを聞かなければいけません。国家単位がない組織で、目の前の知事の言うことを聞かなければいけないから、権力に特に弱い体質になっている。ぼくは警察庁の優秀なキャリア警察官僚にいつも言っているのは「国家警察を創るべきだということを、国民に発信して下さい」ということです。国家には国家の警察が必要なんです。しかし日本には自治体警察しかないから、最高権力の首相官邸から言われたら、どんなに不当逮捕であっても実行するだろうと考えて、これは講演会とかすべて駄目になる、裁判で戦おうと心に決めて「逮捕はいつですか」と聞きました。

ところが、その後に警察組織の中の人から、こう言われました。「青山さん、あなたが言うように、確かに権力に弱いよ、わが警察は。しかし、やるときはやるんだよ。官邸から言われる前に、とっくに、なんであなたが一人だけ福島第一に入れたのか、もう調べてあるよ。吉田昌郎所長から正式な許可を得て、そして入る入らないは、あくまで所長の権限だということを確認してるから、とっくに調べはついている。どこの誰が何を言おうと、逮捕なんか、しない」と言ったんですよ。ぼくは、その翌日に検察庁に行きました。そして検察の首脳クラスの人に「警察が拒否したら、今度は検察に言ってくるかもしれない。しかし、逮捕しないでくれ、と言うものではありません。公平に、正義に基づいて判断してください」と言いましたら、この人は「青山さん、あなた、ぼくのメール見ていないの」とおっしゃるのです。そこで、二人してぼくの携帯電話を見ていったら、確かにありました、現職の検察首脳陣からの携帯メールが。そこには「青山さんの福島第一原発入りを断固、支持する。真実を国民に明らかにしない官邸が悪い」とありました。ここにも良心派がいると、ぼくは感激したのです。

話が逸れましたから元に戻しますと、去年の7月は実はそういう時期だったんです。それでも、ぼくはこのイギリスのスコットランドのエディンバラに必ず行かなきゃいけないと思った。独立総合研究所の青山千春博士と、若い研究員を連れて3人で行ったんですが、絶対行かなきゃいけないと思ったのは、事前の情報として、その発表では、日本海の資源の話が中心になり、そして中国が一番発表するという話を事前に聞いたからです。それを聞いたから、無理を押しでも出掛けて行ったんです。そして出掛けて行ったら、このエディンバラ城の近くで開かれた学会に出てみたら、中国の発表は確かに沢山あったけども、日本の話じゃなくて、全部、南シナ海の新しい資源の話なんです。石油とか、今までの天然ガスとかではなくて新資源です。中国は今、南シナ海でどんな無茶をしているかご存知

でしょう。あの広い南シナ海を全部、中国のものだって言っています。その狙いのひとつが、南シナ海の海底に眠る新資源です。そして、日本海の資源の話をしたのは実は韓国だったんです。その韓国の発表が、この大きな学会の中で1番数が多くて、その数が多かった韓国の発表の全部が島根県の竹島の南の海底にある新資源の話だったんです。本来は島根県の資源の話が韓国が勝手にやっているわけです。そしてさらに、わたしたち日本国民が注視せねばならないことがあと2点あって、1点は、彼らはその新資源を2014年までに実用化すると明言していることです、2014年ってもう再来年ですよ。もう1点は、竹島のある日本海をこれも勝手に東海と、名前を変えてしまっていることです。

さて皆さん、この新資源とは何かを知ってる人、いらっしゃるでしょう。手を挙げて下さい。…何人かいらっしゃいます。すごいです。じゃあ、着物を着てらっしゃる女性の方。(来場者：メタンハイドレートです。)

はい、ちょっと拍手して下さい。その通りです。これは韓国だけじゃなくて、もう一回レジュメを見て頂くと、アメリカ、中国、インドといった国が注目しています。じゃあ、残り13分ぐらいらしいですが、メタンハイドレート、いま着物姿の方が仰って下さったように、白板に書きましょう。メタンハイドレート、です。末尾を『ド』と言われる方も多いのですが、『ト』です。メタンハイドレートは、科学の世界でもさまざまに表現されるんですが、一つは、「第4の埋蔵資源」です。埋蔵資源というのは、地球が活動することによって生み出されて、それを掘り出せば使える資源のことですね。そして本当は、風力とか太陽光とか太陽熱も、地球を含む宇宙の活動によって作られるエネルギーで、有限です。持ち時間がもうあまりありませんから、すこしだけ申せば、風力発電を一番やっている国の一つはデンマークです。デンマークに行くと、デンマークの環境省の人たちと議論したとき、知日派の人に言われたのは「日本に帰ったら、青山さん、あなたは自由な民間人だから日本政府に言って下さいね。風力は、あくまで電源のひとつとして大切なのであって、日本で風力を主電源、主な発電手段にすることは薦めません。風力発電の設備をたくさん建てると、日本の美しい自然がすっかり変わり、どこを見ても風車が回っていることになりかねない。さらには低周波の音で、特に女性がなぜか苦しむことが起きかねない。限度をもって導入するのならいいけれども、それを超えてはいけいけないということを伝えて下さい」ということでした。今、自然エネルギーは無尽蔵だというイメージがマスメディアによって作られていて、学者や評論家の方々も、それに沿って発言している人が多いですね。自然破壊や低周波の騒音についても、「それなら海に発電用の風車を建てればいい」とメディアも学者も評論家も口を揃えています。洋上風力発電ですね。しかし、電源を主として担えるほどに海に建てると何が起きるか。ちょうど今、梅雨が明けましたけど、梅雨が明けるときに例えば海に大量に風車を並べてそこで風のエネルギーを吸収してしまうと、日本の大地に届く風の量が減ります。もう一回言いますが、風は有限です。太陽光も太陽熱も全て有限です。有限な風を海の上で受け止めてしまうと、大地に届く風の量が減って、梅雨が明けた後も十分に乾かなくなるから、日本の農業に影響が出ることが予想されます。農業は本当は日本の数少ない成長産業です。日本の希望のひとつは、農業が輸出産業になることですが、それが深刻な打撃を受けかねない。風力も太陽光

も太陽熱も、そして地熱なども大切ですが、あくまで補助電源です。原子力の減った分を直接、補えるのは、火力です。その火力は、従来の火力発電よりも地球環境に影響が小さく、コストも安いものでなければなりません。メタンハイドレートは、石油による火力より環境への影響が小さい。理由は、この少し後で説明します。そして、日本の海から自前で採れば、中東をはじめ海外から買うよりはるかにコストは安い。特に、日本海の良質なメタンハイドレート、メタンハイドレートというのは実は簡単に言うと2種類あるのですが、そのうち最も良質なものが日本海にあるという研究が進んでいます。その日本の海の資源を韓国が自分のものとしてやろうとしているのが、本当の竹島問題です。そのメタンハイドレートは、先ほど申しましたように「第4の埋蔵資源」と言われています。なぜか。風力や太陽光、太陽熱だって、宇宙や地球の作り出すエネルギーですが、その中で一番最初に人類が注目したのは石炭ですね。一番見つけ易くて、一番使い易かった。これが第1の埋蔵資源です。しかし、石炭は使いやすいけども、一番効率が悪くて真っ黒な煙を出して、明らかにもっといいものがあるということで、第2の埋蔵資源の石油になったんですね。石油はエネルギーを作るだけじゃなくて、例えばプラスチックを生み出してくれたり沢山の良い点があるけれども、明らかに地球環境を変えたから、今は3番目の天然ガスが主ですね。天然ガスもCO<sub>2</sub>は出ますけれども、石油に比べると大体2割ぐらい少ないから、この天然ガスが世界の主流になってるんです。皆さんその上で、石油とか天然ガス、つまり3番目までを考えて頂くと、日本には確かにとても少ないです。ゼロではありませんがとても少ないから、そこまでだったら、つまり人類がそれ以外のものを見つけられないんだったら、日本は本当に資源小国なんです。

ところが人類は幸いなことに今から15年ほど前に第4の埋蔵資源というのを発見したんです。それが今、白板に書いたメタンハイドレート。これは石油とか天然ガスより名前が難しそうですね。だから馴染みにくいということもあると思うんですが、難しくないんです。どう難しくないかという、まずメタンって書いてますね。メタン・ハイドレートの前半は、メタンですね。メタンというのは天然ガスの主な成分です。だからメタンハイドレートって難しそうに言うけれど、要は天然ガスです。天然ガスの中でも、海の底に多くあるんです。海の底にあると、ガスに何が起きるか。まず、海の水の巨大な圧力がかかりますね、ものすごい水圧が掛かります。そして海底は、太陽の光が届かないので冷たいです。圧力が掛かって温度が低いとガスが凍ります。凍ったやつをメタンハイドレートと言っているんです。だから何のことはない。凍った天然ガスというだけのことです。ハイドレートは、英語だと hydrate ですが、これは科学の言葉で何と言ってるかという、水和物と言ってます。興味のある人はメモして下さい。水和物って何のことかという、メタンの分子の周りを水の分子が囲ってるってことです。これ、実際に見ると氷です。氷というかシャーベットです。実はこの大阪から近い和歌山県御坊のエネルギーパークという誰でも入れる施設で、わたしたちはメタンハイドレートの実物を無償で、一般の見学者にお見せしてきました。そして、現在でも、団体の希望があったらお見せしてるんですが、どんなものかという、現物は、コンビニで白いシャーベットを売ってますね。あの白いシャーベットにそっくりです。それを例えばガラスの皿、皆さん、小学校とか中学校の理

科の授業を思い出して頂くと、シャーレって言いますよね。そのシャーレにメタンハイドレートの実物を載つけて、たまたま、そこにおいでになった色々な世代の一般市民の方に見て頂き、触って頂くんです。触っても大丈夫ですから。そして例えば独立総合研究所・自然科学部長の青山千春博士が出張でそこに行ったら、大赤字なんですが出張で行ったら、その皆さんの手から戻ってきたシャーレの上の白いシャーベットに例えば100円ライターのような火を近づけるだけです。それだけで、ポッと青い炎を出して燃えるんです。だからこのメタンハイドレートのことを科学の世界で「燃える氷」と言っています。国際学会でも、よくそういう表現が使われます。このメタンハイドレートはどこで採れるか。ぼくは「神様のいたずら」だと言ってるんですよ。というのは、今まで日本が高い値段で買ってきた天然ガスとか石油とか沢山取れるところは中東だというのは、よくご存知ですね。その中東、例えばカタールという国があって、ぼくは何度か訪ねていますが、今もカタールに行き帰ってきたばかりです。カタールで何を確認してきたかという、カタールで作った天然ガスを日本がどれくらい世界で一番高く買ってるかを公表ベースの統計数字ではなく、現場で確認してきました。アメリカがカタールから買った液化天然ガスの値段と比べて、日本が買った値段は最大ではおよそ1.1倍、そして同じ敗戦国のドイツを含めてヨーロッパの買った値段の最大でおよそ5.5倍。その値段で買ってるんですよ。もちろん日本向けの値段が一番高かったピークのときの値段ですが。だから日本の電気代がすごく高いわけです。そのカタールには、すぐ行けます。ここは大阪ですね、関西国際空港から直行便が飛んでいますから、カタールに行かれて、泊まるホテルが50階の部屋だったり、すごい高いところの部屋です。値段は高くないんです。普通の部屋がそれだけ見晴らしが良い高層建築です。そして、できたら工事現場に行ってみてください。しょっちゅう工事してます。工事現場へ行くと、暑くて工事ができないから夜中だけやってるんですが、日本の丁寧な工事ぶり比べると、どう見ても、違う工事ぶりです。暑さから労働者を守るためにも、やむを得ないんですね。そのような工事ぶりで超高層ホテルを造って、皆さんが50階の部屋に泊まっても大丈夫なんです。どうしてですか。

(来場者： 地震がないから。)

はい、拍手して下さい。そのとおりですね。つまり、今までのこの電気を作っている資源、すなわち石油とか天然ガスを生み出していた国というのは地震が起きないんですよ。地震が起きなくて資源はあるという幸せな環境だったんですね。ところが、このメタンハイドレートだけは、第4の埋蔵資源だけは最初から分かっていたのは「これまでの人類の常識とは真逆だ」ということなんです。中東にはメタンハイドレートは殆どありません。どこにあるかという…ぼくの両手の動きを見てください。海の中でこうやってプレートが潜り込みますね。このプレートが海底で跳ねたり沈んだりするから大地震が起きるんですね。3月11日もそうでした。そのプレートが海の底で潜り込むところにメタンハイドレートは作られるんです。従って、今までの世界と真逆で、地震が起きて苦しんできた国にこそ、神様の最後のプレゼントのようなメタンハイドレートが有るんです。だから世界は最初から日本にも注目していたわけです。そして、日本政府は自民党政権の時代から、およそ500億円の税金、わたしたちのお金を使って調べてきたんです。ところが、まだ

全く実用化されていません。それはどういうことかという、1カ所しか調べなかったからです。その1カ所はどこか。それは、この大阪と深い関係のある南海トラフです。トラフというのは、海底の窪みのことです。そこで地震が起きることを皆さん心配してますよね。大地震が起きるとひょっとしたら大阪城以外はみな、津波に沈むと予測している学者すらいらっしゃいます。それは大変な危険なリスクだけれども、同時に大地震が起きそうな所はメタンハイドレートが沢山あるはずだから、そこで調べてきたのは実は間違いじゃなかったんです。間違いじゃなかったんですが、最後にこの図だけ見て頂きますと…後ろの方、見えますか、大丈夫？後ろの若い人。

海底がありますね。そして海の水が乗っかっていますね。そして海面がありますね。船がいますね。南海トラフをはじめとする太平洋側のメタンハイドレートは確かにあることはわかりました。存在してないじゃない。本当にありますが、存在の仕方が、なかなか難儀なんです。まず海の深さが4000mぐらいで、深い。そしてそこから数百メートルを掘ってようやくメタンハイドレートにたどり着きますが、この白板に点々で書いているように、太平洋側のメタンハイドレートの多くは、今まで分かった範囲で言えば、砂とメタンハイドレートの粒が分子レベルで混ざり合っていて、すごいお金をかけてここから取り出しても、どれが砂なのか、メタンハイドレートなのかなかなか区別が付かない上に、当然ながらこれを選り分けるときに時間とコストが掛かります。資源は、存在していても活用するためのコストが高かったら使えませんから資源じゃない。子供時代に川で砂金を掌に乗つけたでしょう。でも、それを利用しようとする、ゴールドを市場で買うよりも高く付くから結局川に戻すしかない。それと同じことが、太平洋側のメタンハイドレートでは続いてきました。ところが、さっき皆さん韓国の話を思い出して下さい。去年(2011年)の7月に彼らが発表したのは日本海の竹島の南の海底にあるメタンハイドレートですね。なぜ日本政府は日本海をやらないできたのか。日本が戦争に負けた理由の大きなひとつは、一度決めた方針を変えられないことです。戦艦大和が、当初の方針通りに飛行機を積めない戦艦として海に浮かぶのではなく、設計変更をして空母だったら、日本の命運は変わっていた可能性もあります。方針がいったん決まると、そこに利権が絡んで、柔軟に変えるということができなくなる。その体質が変わっていないことが、理由のひとつです。もう一つ、深刻な理由は、敗戦後の日本は「資源のない国」でいることそのものが利権になっています。「資源のない国だから」と国民が思い込んでいる限りは、異常に高い天然ガスや石油を海外から買ってきても、誰も文句を言いません。値段が高いと、日本の石油会社や商社、輸送会社の利ざやも大きくて、そこに官僚と政治家が群がります。

その既得権益を打ち破るために、竹島を含めた日本海を、今日はもう詳しく話す時間はありませんが、政府がやらないんだったら民間で研究しようと、例えばわたしの個人借金も含めてコツコツと調べてきたんです。そして、青山千春博士は、まず、日本女性で初めて大型船の船長さんになり、その後、今度は研究船に乗って、船長をするのじゃなく、船に魚群探知機を乗付けて研究しています。魚群探知機ですよ、普通の漁船が載付けてるやつですからお金は殆ど掛かりません。その魚群探知機から超音波を出して、海の中を見る。それも魚の群れなどの水産物ではなくて、海の埋蔵資源を見るというメソッドで、特

許を持っています。日本の特許と中国、韓国、アメリカ、オーストラリア、そしてロシアの特許を持っていますが、特許使用料は1円も貰ってませんし、これからも貰いません。わたしたちは儲けるためにやってるんじゃないんです。祖国を資源大国にするためにやってるんです。日本で特許料を取らずに、他国に請求するという不公平なこともしません。そのノウハウ、特許技術で何が見つかったかという、日本海は海底から巨大な柱が立ってるんです。いま白板にその柱を書きましたが、後ろの人見えますか。これ、適当に書いたように見えるかも知れませんが、本当にこういう格好の柱なんです。平均で言うと、今のスカイツリーぐらい、650m前後、一番ちっこいもので300mぐらい、300mというと東京タワーですよ。ちっこくても東京タワーぐらいの巨大な柱が、実は日本海では海底から立ち上がっていて、そしてこの柱の下に真っ白な固まり、すなわち結晶状になったメタンハイドレートが海底に露出しているんです。海底の中にあるものも、とても浅いところであって、だからメタンハイドレートの粒そのものが柱のようになって海面目指して上にあがってきてるんです。この話というのは、日本海だけをやれと言ってるんじゃないありません。太平洋も日本海もわたしたち国民の大切な宝物です。そして、太平洋側も時間は掛かりますが必ず実用化できますから、日本政府は、本当は日本海をまずやって、掘み出しやすい固まりのメタンハイドレートを取り上げて、火力発電所で使うべきです。ぼくは火力発電所の所長たち、複数の所長さんたちに会って確認しましたが、日本海の塊のメタンハイドレートは上に上げて溶ければ、そのまま天然ガスですから、今の火力発電所でそのまま使えるんです。皆さん、液化天然ガスを買って電気を作ると、自前のメタンハイドレートで電気を作ると、どれぐらい電気料金が違うか、誰でも本当は期待しますよね。それだけじゃなくて、このメタンハイドレートの柱、科学の言葉ではメタンブルーム（メタンの柱）と言いますが、この瞬間も海底から生まれて、海面近くで、水圧が軽くなって温度も上がるために消えています。するとまた、ブルーム（柱）が生まれて立ち上がってきます。つまり、採ったら終わりの旧来型の天然ガスと違って、次から次へと生み出されている可能性があります。すると日本の需要を満たすだけでなく、例えばベトナムとかモンゴルとかフィリピンとか、中国の圧迫に苦しんでる国にフェアに安く分けることができます。アメリカは資源を使って世界を支配したけれども、日本が違う生き方を、アジアの民主主義のリーダーとして示すことができる。

日本国は本当は、戦争に負ける前からオリジナルな民主主義の国です。民が一番大事という国です。京都御所に行かれたらわかるじゃないですか。天皇陛下の本来のお住まいなのに、お堀も砦もなく、誰でも近づいて堀に触れて、しかもその堀が低くて中が見えるでしょう。世界にこんな皇帝や王の住まいはありません。なぜ、こうなっているのか。民が一番大事ということを日本は貫いてきたから、日本の天皇陛下だけは襲われる心配がないんです。だから堀があんなに低いわけです。中が見える、お濠もない、砦もない。それを考えたら日本のオリジナルな民主主義が分かります。民主主義を敗戦でアメリカに教えてもらった、というのこそ、敗戦後の間違っただけの教育の大きな嘘のひとつです。だから、アジアの民主主義のリーダーとして、メタンハイドレートを自分で使うだけでなく、そういう世界の弱い国々に安く分けることによって、アジアの自立を助けることができるん

です。だから素晴らしい品質の日本の農産物の輸出と、このメタンハイドレートの国内消費と輸出が日本の本物の希望であり、それを護るのは誰ですか。海上自衛隊や海上保安庁という海上の防衛力において、この任務を誰が果たせるのでしょうか。今日はもう細かい話はできませんが、先ほどの青山千春博士の特許技術によって魚群探知機から超音波を出したときに、実は中国船から強力な超音波を出されて邪魔をされたりしたこともあります。その時に海上自衛隊がご存知であっても、手を出すことはできません。何故かという、日本国には交戦権がないとか、防衛出動を閣議決定しないと何もできないとか、そういうおかしな定めがあるからできないだけのことです。敗戦国として当たり前のように、わたしたちは学校教育やマスメディアによって思い込まされてきましたが、こんな奇怪なことはありません。世界の主要国はみな、戦争に負けています。敗戦の歴史があります。一度負けたからと言って、交戦権を否定したり、危機に即応できない国にならなければいけないのなら、それがどんどん戦争を誘発するでしょう。自国を守ることが難しい国ができれば、そこに付け込む動きが必ず出ますから。今日、最初に申した拉致被害者を取り返しに行かない陸上自衛隊と同じことです。本当の責任はわたしたちの考え方にあるんです。そのことを理解して下さい。

もう赤星さんの持ち時間をそろそろ侵しつつあるから、ここまでにしておきます。

本当はレジュメの一番下の方にある「今こそ直視すべき日本の根っことは何か」という項目をお話したかったのです。そこに『わたしたちが60年以上忘れていた領土』とありますが、それは東京都の硫黄島のことです。そして、その下に沖縄の『白梅の塔』とありますね。これが『ひめゆりの塔』なら、皆さん、ご存じでしょう。沖縄戦で、わたしたち子孫のために戦ってくださった英霊を看護してくださったのは、沖縄のわずか15歳から18歳ぐらいまでの少女たちです。それを戦後に学徒看護隊と呼んでいます。ひめゆり学徒看護隊だけが思い出されて、その少女たちが自決した場所の、ひめゆりの塔だけが知られているけれども、本当は学徒看護隊は全部で9つあって、ひめゆり以外は沖縄でも忘れられてるんです。沖縄で忘れられてるということが悪いことじゃない。そうじゃなくて、本土と沖縄を分ける考えじゃなくて、わたしたちは共通して見逃してきた歴史があるということをおぼえておくことが大切ではないでしょうか。

すいません、主催者の方。局長。あと1分だけ良いですか。赤星さんは軍人だから認めて下さる。

あと1分だけ、最後の1分でお話したいのは、去年の4月22日に福島第一原発に作業員以外では初めて入ってわたしが目にした現実、恐ろしい破壊の姿でした。地震ではなくて津波で破壊された。しかし、それよりももっとぼくの胸を打ったのは、いまだにこの胸にあるのは、ぼくが出会った19歳から67歳までの作業員の方々です。67歳の方々は定年になって、楽に暮らせてるのに、責任を感じて自分で歩いて来られたんです。今日も福島第一原発にいらっしやいます。その作業員のうち日当だけを目当てに働いている人に、ぼくは会わなかった。いなかった。「福島とチェルノブイリは違うんだ、1人の死者も出さない、放射線障害による死者は1人も出さない」というプライドをかけて、去年からずっと戦い続けてきたんです。吉田昌郎所長というすごいリーダーじゃなくて、



たとえば19歳の彼、高卒で働いている、その作業員の姿を見て、ぼくは東京に帰る気がしなくなって、予定を変更してさらに北上し、その晩は仙台にどうにか泊まって、翌日どこに行ったかという、宮城県の南三陸町に行ったんです。南三陸町、皆さんご存知ですね。骨組みだけ残った町役場の防災庁舎、今は赤い骨組みだけになった、その庁舎の2階のところで遠藤未希さんという、結婚式を1週間後に控えた24歳の若い女性と、その上司の三浦毅さんという50過ぎの、ふつうの課長補佐と、二人そこに残って津波の緊急放送を続けたから、南三陸町の町民には助かった人も沢山いるのですね。そこの現場に行ったら、花が手向けてあるんですよ、白い花が。周りは瓦礫だらけで草木一本もないのだからここから持ってきたのかと、それを確かめたいから後で来ようと思って、まず回ったのが、瓦礫の処理をしている陸上自衛官のところ。陸上自衛官のところに行ったら、なんです、瓦礫の作業するときに、持ち込んだ大きな機材を一切使わずに、隊員の中には、手袋をしないで瓦礫を一つずつ持ち上げている隊員がいる。去年の4月ですよ、まだ包丁とか鋏とか、それからガラスの破片が無数にある状態です。だから実際にこの手のふくらの所を切ってる隊員もいて、ぼくはびっくりして連隊長の所に飛んで行って、「止めさせてください、手袋を付けさせてください」と言ったら、連隊長が「またやってますか。自分で手袋を外してしまうんですよ」と言われたんです。だからぼくは隊員の所に戻って、「どうしてですか」と聞いたんです。そしたら「青山さん、瓦礫、気がついてますよね」。そうです、瓦礫には、ほとんどの瓦礫に服が絡まってるんです。瓦礫の1つ1つに服が。ワンピースとかシャツとかネクタイとか。何故か分かりますよね、タンスが流されたせいじゃないですよ。人間が流されていくときに裸にされるんです。もう1ヶ月経ってるから瓦礫の下で亡くなってるって分かってるのに、われらが陸上自衛隊員はそこご遺体を少しでも綺麗なまま取り出して遺族や友達に渡したいために、自分の手が切れても、素手で瓦礫を剥がしてるんです。仕事柄、色んな国の軍隊を見ましたが、こんな軍人は見たことがないです。わたしたち日本国民の誇りが、ここにもあります。そして、その防災庁舎に何度も何度も戻って、最後はちょうど日が暮れるときで、被災者がちょうど黄色い花と白い花を持っていらしたから、もう思わず腕をつかんで「この花、どうされましたか」と聞いたら「あの山です」と指を指されたんです。その小高い山には確かに奇跡的に頂の所に草木が残っていて、ぐちゃぐちゃな山をそこを手分けして登られて、そして花を取って手向けられているんです。ぼくは、「命を助けられたからですね」と言ったら、「青山さん、それもあるけど本当は違いますよ」と言われるんです。「青山さん、この瓦礫を見て下さい。どうやってこれから生きていけばいいのか、分からなくなる。これからの生き方を教えてくれたのが未希と毅ですよ。」高齢の方だから二人を呼び捨てで仰いました。「未希と毅が教えてくれたのは、日本人はいざとなったら、自分のためじゃなくて人のため、皆のために命まで捧げるんだって生き方を教えてくれたから、皆それを忘れないように、こうやって花を手向けてるんです」と言われたんです。

そして、ぼくはこれでお別れですが、レジュメの最後の所をもう一度、見て下さい。沖縄の白梅の塔です。先ほど申しましたように、沖縄の少女隊達は、今からたった67年前にわたしたちの先輩がアメリカ軍の侵略を沖縄で食い止めるために戦ったとき、看護して

くださり、水を探し、薬を探し、将兵のちぎれた手や足を持って、どうにかくつつくようにと、それまで何も知らなかった少女たちが懸命に軍医を手伝ってくださった。戦争でも侵略は侵略です。アメリカの侵略を、沖縄で食い止めて、大阪や東京や京都に来ないように戦って下さった先輩の方々が頭が割れ腸が出たときに一緒に苦しんで下さったのは沖縄の少女達ですね。そう、ひめゆり部隊ですが、先ほど申したように、実はそれ以外に8つあったんです。同じ学徒看護隊が。全部で9つあって、そのうち、この白梅の塔というのは、白い梅というのは、沖縄第二高等女学校の校章でした。できたらそこに行って下さい。そこに自決壕があって、少女が自決なさった洞穴があって、ひめゆりと違って観光地じゃないから、昔のままです。たとえば、ぼくはそこへ33年間お参りし続けていますが、例えば赤星海上幕僚長が行っていただくと、その自決壕の所に赤星さんが立っていただくと、壕は、すごく怖いんです。何故かというとな少女が、そっと触れに来ます。嘘だと思うなら行って見て下さい。おかつ頭やお下げ髪の少女が、永遠に15歳の、まだ恋も知らない少女達が触れに来るから、33年お参りしてても怖いんです。ぼくらは怖くても、しかし、少女たちには何が起きますか。たとえば、ぼくやこの赤星退役海軍大将を触ったら、ああ日本はこうやってちゃんと人材が居て、国が続いているんだと分かるじゃないですか。「無駄死にじゃない、軍国主義に騙されて犬死にしたんじゃない」ということが少女には分かりますね。少女はやっとそこで報われる。皆さん、できたら行って下さい。その少女と、南三陸町の遠藤未希さんとまっすぐ繋がってるでしょう。わたしたちは敗戦後どんな教育を受けても、ずっとわたしたちが培ってきた、天皇陛下と一緒に培ってきた魂は奪われてはいないのです。

被災地を身体がおつらくても回られている今上陛下もご覧になって下さい。必ず、お膝を屈せられて、わたしたちと視線を合わせてくださる。『あなたこそが日本国でいちばん、大切です』とそのまなざしで語りかけてくださる。わたしたちのオリジナルな民主主義の精神、そしていざとなれば自分のためじゃなく、人のため、公のために生きる精神、それは何も減びていない。だから海の祖国は甦る。その海に自前の資源を持っている。それをもって中国の独裁に負けないアジアの民主主義を育てていく。それを皆さんと、これからも考えたいと思います。では、幕僚長、敬愛する赤星幕僚長にお譲り致します。ありがとうございました。

#### 【司会】

ここで、当初でございましたら、10分程休憩をとる予定でございましたが、時間的に青山先生がかなり消費していただきましたので、これから、赤星先生に引き続いてご講演をお願いしたいと思います。

赤星先生にご講演していただきますのは、第1回関西総合防衛セミナー第1部「海上自衛隊60年」ということで、お話をさせていただきます。

昭和27年4月、海上自衛隊が「海上警備隊」として発足してから、本年は60年の節目に当たります。

海洋と我が国の安全保障を考えるにあたりまして、海の守りの要である海上自衛隊のこ

れまでの歩みを振り返り、現在の活動と将来像を見通すことは、まずもって押さえておくべきキーポイントではないかと思われます。

そこで、第1部ではテーマを「海上自衛隊60年」といたしまして、前海上幕僚長・海将の赤星慶治先生を講師としてお迎えいたしました。

ここで赤星先生のご経歴を簡単にご紹介いたします。

先生は、昭和48年に防衛大学校をご卒業、海上自衛隊に入隊され、以後、第3航空隊司令、第4航空群司令、海上幕僚監部監理部長、横須賀地方総監部幕僚長の要職を歴任され、平成17年に海将・航空集団司令官、平成19年佐世保地方総監、平成20年に海上幕僚長に就任されました。平成22年7月に退官され、現在は、川崎重工業株式会社顧問をお勤めでございます。

本日は「海上自衛隊60年の軌跡と展望」というテーマでご講演いただきます。

それでは、先生、よろしくお願いいたします。

#### 【川崎重工業(株)顧問 赤星慶治氏】

画像をお願いします。(1分間DVD放映)

ご紹介いただきました赤星です。今日はお招きいただきまして大変ありがとうございます。

海上自衛隊という名前になったのは、防衛庁ができた昭和29年ですが、発足は海上自衛隊の前身である海上警備隊が昭和27年にできた年です。従いまして、今年が60年目になります。いわば還暦を迎えたということになります。

還暦というと、人間にすれば私のような白髪頭の初老ですが、自衛隊の場合には、人は、50代半ばで全て入れ替わり、装備も近代化して中身はほとんど変わります。従いまして海上自衛隊は還暦といえども、いわば日焼けして引き締まったカッコいい青年海軍士官の様相を呈している、それが海上自衛隊の現状ではなからうかと思えます。

防衛省の中でそれぞれの自衛隊を揶揄しているのでしょうか、からかった言い方として4文字で言われることがあります。レジメにちょっと書いてありますけれども、海上自衛隊の場合には、「伝統墨守、唯我独尊」と。これは、からかった言い方ですので、伝統を守って融通が利かないとか柔軟性がないとか、あるいは、自分が一番であるということと他人の意見を聞かないというような意味かと思えます。一方において、海上自衛隊が今あるのは、帝国海軍とアメリカ海軍のおかげだというふうにも言われます。

この2つの言葉を私なりに解釈しているんですけども、帝国海軍からの良い伝統を守って、アメリカ海軍の教えを受けて成長し、かつ日米同盟の下支えをしているのは、海上自衛隊と米海軍の連携であるという思い。これがいわば伝統墨守、唯我独尊かと私なりの解釈で若干無理があるかもわかりませんが。ということになると、必ずしも揶揄した言葉というよりも、ある程度的を射的的確な言葉ではないかと思っています。

この2つのキーワードで、この60年間を振り返ってみますとよくわかります。かつ展望についてもこの2つのキーワードで考えるとある程度占うことができるというのが私の見解です。もちろんこれは個人的な見解で海幕の見解ではありません。できるだけ私の経

験から個人的な意見、感想を交えながらお話をしたいというふうに思います。

ちなみに、四文字熟語で陸は「用意周到、動脈硬化、(頑迷固陋)」とも言われます。空の場合には、「勇猛果敢、支離滅裂」、内局が「優柔不断、本末転倒」と言われているようです。これは誰が言い出したかよくわかりません。一説によると防衛記者会が言い出したと言われております。ちなみに防衛記者会は、「浅学非才、馬鹿丸出」。これは別に私が言ったことではありませんので。というふうに言われております。早速生い立ちから入らせていただきます。

先の大戦敗戦後、昭和20年、日本には、陸、海軍が一部を除いて解体され、軍事力がゼロになりました。5年後、昭和25年、朝鮮戦争が勃発、そして日本にいた連合軍は、ほとんどが朝鮮半島に出動するという事態になりました。ふと気づいたら日本の治安の問題、あるいは、日本の国内外からの共産勢力に対する対抗に不安が生じた。

これを感じたのが、マッカーサー元帥です。マッカーサーは、すぐにこれではいかんということで、警察力の強化と、海上での警察力である海上保安庁の強化を申し出ました。これについては、すぐに認められ、昭和25年の10月には7万5千人の警察予備隊が発足されました。

警察予備隊は、陸上自衛隊の前身です。ところが、海上保安庁の強化については、8千人の増員は認められたのですけれども、どういう組織にするかということがなかなか決まりませんでした。

そこで、時の内閣は吉田茂内閣ですけれども、早く海上保安庁の強化のための組織を検討する必要があるということで、検討委員会の設置を内閣直属に設けました。そのときに、この検討委員会の中身の検討、あるいは人選をするように指示されたのが、海軍最後の海軍省軍務局長・山本善雄元海軍少将と、当時の海上保安庁長官・柳澤さんです。この2人に検討を命ぜられ、2人は、お互いに相談して10人による検討委員会を作りました。

構成は、海上保安庁長官と警備救難監と他は8名の帝国海軍軍人です。名前が「Y」委員会と名付けられたところです。聞かれた方もあると思いますけれども。なぜ「Y」と付けられたかにつきましては、戦前日本では陸軍は「A」、海軍は「B」、民間が「C」というふうに呼ばれていました。

当初は「B」委員会という案もあったようですけれども、当時の風潮として日本からは軍事力は全て消し去ると、軍隊は一切ならんという風潮のなかでありましたので、「B」委員会と作った場合、これが新海軍再建のための検討委員会ととられかねない。そうした場合、つぶされてしまう恐れもあるということで、機密保持上、アルファベットのABCの逆順のXYZの後ろから2番目の「Y」をとって「Y」委員会と名付けられたようになります。

この8名の「Y」委員会の軍人、ほとんどが当時でいう第二復員省所属です。第二復員省というのは、終戦の時に外地に残された、海軍軍人や軍属を本土に復員させるための仕事をしてきた復員省の人たちです。この海軍軍人の中で、やはりすごい見識のあった方たちだと思いますけれども、中心人物は当時課長であった吉田英三元海軍大佐、この人を中心に昭和23年の頃からですが、もし日本が独立を回復すれば、海上防衛のためには海軍

の再建が必要であるという見識の下、復員業務の傍ら秘密に海軍再建のための研究をされていきました。この研究成果は、政府の要人、すなわち吉田茂内閣の要人、それとアメリカ海軍にも伝えられました。この橋渡しをした人が野村吉三郎元海軍大将、アメリカの大使をやられたり、外務大臣をやられた国際派の海軍軍人です。アメリカ海軍の窓口となったのが、当時、極東米海軍司令部の副参謀長であったアーレイ・バーク海軍少将です。

「Y」委員会は、昭和26年の10月に設けられて翌年の2月まで約半年、29回にわたって喧々諤々の議論が行われました。

その議論の内容は、基本的に2つの意見の対立です。1つは、海上保安庁側が主張する強化策は、コーストガード的、海上保安庁の強化で良いという案と、海軍軍人が主張する海上防衛のためには海軍が必要であるという両方の意見の対立です。これに決着を付けたのが、アメリカ海軍の意見です。最終的な合同委員会の席で、アメリカ海軍の意見は、「新組織は、コーストガード程度ではなく、海上保安庁の強化ではない、海上防衛のためには、海上保安庁と分離した組織が必要である」という意見です。これにより、限りなく海軍に近い海上自衛隊が創設されることになったわけです。まさに、帝国海軍と米海軍のおかげが海上自衛隊の発足です。

ちなみにアーレイ・バークさんという人は、「31ノット・バーク」と呼ばれた駆逐艦乗りの猛将です。戦争中駆逐艦などの艦隊の航行スピードは30ノットが最高と言われていました。当時、アーレイ・バークさんは、「我、31ノットで進出中」という電報を打って日本海軍と戦ったそうです。これをもって「31ノット・バーク」と呼ばれた人です。バークさんは、敵として戦った日本大嫌い日本人嫌いの人でしたが、昭和25年、日本に副参謀長として来日して、多くの日本人、特に帝国海軍軍人たちと接して、日本を理解し、日本の理解者となり、独立後の日本に海軍が必要であるという認識の下、機密研究をアメリカに伝えた人です。バークさんは、この5年後、きわめて異例の早さで大將に昇任します。そしてアメリカ海軍のトップになります。CNO、作戦部長という名前で呼ぶんですけれども、異例の長さ6年間にわたりアメリカ海軍を率いることになります。この間、バークさんは、日本に対する護衛艦あるいは哨戒機の譲り渡しについて尽力いたします。まさに、海上自衛隊の生みの親の1人です。

バークさんは1996年、昭和61年、94才で亡くなりますが、亡くなられた時にご自身の遺言により、棺の中には昭和天皇からいただかれた勲一等旭日大授章のみを棺に納められたという方であります。

まさに海上自衛隊は、生い立ちから帝国海軍と米海軍のおかげであると思います。

このようにして発足した海上自衛隊。当初の装備は全てアメリカのものです。船にしても、飛行機にしても、潜水艦にしても。しかし、これらを運用できるのは、やはり、帝国海軍の軍人しかいないということで、主要な人物は全て海軍の生き残りの人たちで海上自衛隊は始まっております。

海軍からそのまま引き継いだきわめて具体的な顕著な例として、掃海部隊というのがあります。戦争中日本周辺海域には、敵味方、アメリカ軍、日本海軍両方から約7万発ぐらいの機雷が日本周辺海域にばらまかれました。終戦になってもこのほとんどは遺棄された

ままでした。瀬戸内海だけでも約7千発の機雷が遺棄されたと言われていました。終戦後の日本の復興のためには、これを一刻も早く撤去する必要があるということで、終戦後まもなくからこの撤去作業に当たったのが海軍の掃海部隊です。大体7年間、この掃海作業に要しています。昭和27年になってやっと大丈夫だろうという安全宣言が出されました。この7年間の間に78名の犠牲者が出られたというのは、最近ではほとんど知られてないところでもあります。

余談になりますけれども、この掃海関係者の犠牲者あるいは努力に対する謝意の意味で、昭和27年になってから、日本各地の32の港を持つ市長さんたちの集まりで、当然、大阪も神戸も入っていますが、32の市長さんたちの発起で四国の金比羅山中腹に吉田総理揮毫によります掃海殉職者慰霊碑というのが建立されました。それから毎年、今年も行われましたけれども、5月27日の海軍記念日の頃、慰霊祭が執り行われております。

ご存じの方いらっしゃいますか。ありがとうございます。金比羅山に行かれた方はたくさんいると思いますけど、是非今度行かれたら、登って行かれて中腹の右側に大きな錨があります。そちらに掃海殉職者顕彰碑というのがありますので、是非ご参拝いただければと思います。このようなことを、この慰霊碑だけではないんですけれども、続けるっていうのはやはり重要なことではないかと私なりに思っています。

そのほか、水上艦にしても、潜水艦にしても、飛行機についても全てアメリカからもらったものに「米海軍に学べ」ということで、数年前まで敵として戦った、敵の米海軍軍人に対し、敗れた帝国海軍軍人は教えを請うたわけです。立派なことだと思います。

水上艦艇は、当初、PFと呼ばれる1500トン弱の18隻から発足しました。当時の船は、櫂とか楠とか檣とか言う名前と呼ばれたんです。これらを称して、「雑木林艦隊」と呼んでいたようです。

昭和31年になって初めて国産の「はるかぜ」、「ゆきかぜ」という1700トンクラスの船が誕生いたします。潜水艦も1隻だけはアメリカからもらったものです。「くろしお」というアメリカからもらった潜水艦が1隻。これを研究しながら昭和31年になって国産の「おやしお」が、私が現在所属しております川崎重工神戸造船所で誕生いたしました。以降、潜水艦につきましては、いずれも神戸で川崎重工と三菱重工が基本的に交互で造るという態勢を維持しています。海上自衛隊の潜水艦は全ていわゆる在来型といわれる電池推進の潜水艦です。原子力潜水艦ではありません。しかし、電池推進の潜水艦としては、はっきり申しあげて世界のトップです。アメリカ海軍も認める、中国もたぶん認めていると思います。トップです。残念ながらその詳しい性能については、国家機密に属しますので申し上げることができません。飛行機につきましては、全てがアメリカ製です。日本の航空産業については、特にアメリカの思惑もあって、一時期、終戦後6～7年は、日本で飛行機を造ることは禁止されました。ご存じの方もいらっしゃると思いますけど。その後遺症が現在でも残っています。日本のこれだけ高い技術がありながら、まだ、純粋の国産の飛行機は出来てません。YS-11とかできましたけど、これエンジンはロールスロイス製です。

今、初めて三菱がリージョナルジェットというのを造ろうとしていますけれども、まだ

できていません。これほど日本の航空産業は、正直言って世界からはまだ遅れています。しかし、例えば、P-3Cの後のP-1という飛行機を川崎重工で造っています。あるいは、船に乗せる対潜哨戒ヘリコプターSH-60JKという、これは三菱重工が造っています。これは世界的レベルになっています。やっと、航空産業も世界に互せる様な状況になってきた。

若干話がずれますけれども、これから日本が目指す産業の1つは、私は航空産業界の発展ではなかろうかと。1つの切り札として宇宙に対しては、少しずつ持ちつつありますけれども、もっともっと航空産業については力を入れる必要があるというふうに思っています。ただ、異色の存在として、忘れてはならない、私の個人的な思い入れもあるんですけれども、飛行艇というのがございます。新明和関係の方もいらっしゃるかも知れませんが、

実は、私の海上自衛官としての原点は、PS-1という、今はございませんが対潜哨戒飛行艇、これのパイロットが私の海上自衛官としてのキャリアの原点です。多くの事故を起こし、今思い出せば30数名の仲間たちを亡くした事故の多かった飛行艇ではありますけれども、世界に冠たる日本の技術を唯一引き継いだ飛行艇だと自負しております。

その流れをくむのが救難飛行艇US-1であり、現在、US-2に引き継がれ、これが今、インドを始め外国の注目を浴び世界へ羽ばたこうとしているところです。この話をしますと、私の思い入れもありますのでこの辺にさせていただきます。

このようにして発足し、アメリカからもらった装備を日本がどのようにして一級化したか、これも全て米海軍のおかげです。昭和33年から始まりましたアメリカ海軍との対潜特別訓練といわれる共同訓練、あるいは昭和30年代後半から始まった潜水艦のアメリカでの訓練、あるいは昭和50年代に始まったリムパックと言われる多国が集まった共同訓練。これらを通して海上自衛隊は装備の充実と、運用能力、戦術能力の向上を図り、今に繋がっておりますし、この約20年間の努力と実際の成果がアメリカ海軍に認められ、アメリカ海軍が同盟国の他国の軍隊に先駆けてP-3Cやイージス艦を日本に一番先にリリースするという事に結びついていると私は思っております。

まさに海上自衛隊の充実発展も先ほど申し上げました2つのキーワードから見る事ができると思います。

このようにして充実、発展してきた海上自衛隊でありますけれども、この実力が発揮されたのが、次の項目になります。

海上自衛隊に対する批判として「所詮、海上自衛隊は実戦を経験しない訓練部隊、トレーニングフォースでしかないではないか」とか、あるいは「米海軍の単なる補完でしかない」ということをよく聞かされました。私も若い頃聞かされました。確かに一理はあります。海上自衛隊はもちろん、というよりも日本全体が「戦」という実戦は経験していません。しかし、三自衛隊の中でこの平時、通常事態において、任務遂行中に極めて実戦に近い経験を多くしたのは、正直申し上げて、冷戦時代の海上自衛隊だと思っています。

「冷戦」、若い方はあまりご存じないかも知れませんが、ソ連と米国が弾の飛び交う戦いはしなかったけれども、罅迫り合いでせめぎあいを行い、火花を散らし合った

のが冷戦です。特に、日本周辺、ソ連の太平洋艦隊とアメリカの第7艦隊、それと海上自衛隊が弾は飛び交わないけれども、鏝迫り合いをしました。このころ海上自衛隊は、ソ連の軍艦なり潜水艦が、太平洋、その前に日本海、あるいは日本の三海峡、宗谷、津軽、対馬を通過しようとした時には、必ず、まず海上自衛隊の哨戒機が飛んでいって、「ソノブイ」というものを落として、護衛艦がうるさくつきまとう。ソ連の潜水艦が潜って対馬海峡を通峡しようとしても、どこからともなく海上自衛隊の哨戒機が飛んできて、上からソノブイを落として「ピンポン、ピンカーン」とやる。そして沖縄周辺まで追っかけていく。こういうことをずっと、いわば実戦に近い体験をしたのは、海上自衛隊です。その他、海上自衛隊の機雷戦部隊、これは先ほどの掃海部隊、これが機雷戦部隊になるわけですが、非常に高い能力を持っている。まさに実力を発揮したのがこの頃であります。これは、ソ連海軍もこのことは認めております。まさに、実戦は経験していませんけれども、実力を発揮したのがこの冷戦時代です。

さらに、実力を発揮したのが、海外での活動です。最初に自衛隊が海外に派遣されたのは、湾岸戦争後です。イラクがクウェートに侵攻して、これに対してアメリカを中心とする有志連合がイラクを追い出す、そのために起こった戦争が湾岸戦争です。

この時に日本は、国内情勢もあり、この湾岸戦争のために人的な貢献は一切行いませんでした。戦争が終わってから日本が人的貢献したのが、掃海部隊の派遣です。

ペルシャ湾に戦争が終わってから、列国海軍が嫌がる機雷掃海の難しい海域、かつ6月から9月という極めて環境条件の厳しい、50度以上の気温、砂嵐が吹き荒れて目も開けられないような状況下で、掃海部隊が99日間行動して、34個の機雷を除去いたしました。

湾岸戦争が終わって、クウェートが解放された後、クウェートは謝意のためにワシントンポストに貢献してくれた全ての国の国旗を掲載いたしました。日本は当時のお金で130億ドル、日本円にすれば1兆5千億です。日本人平均1万円のお金を出しましたが、クウェートの人たちの記憶には残らなかった。したがって、ワシントンポストには日の丸は載らなかったのです。しかし、戦争後、この掃海艇の活動が終わった後、クウェートから発行された記念切手の中に日の丸が載りました。まさに、札束でほっぺたを叩くような国際貢献など必要ないとは言わないけれども、人的貢献の必要性が表れています。これは今でも続いていると思います。

その後、人的貢献は海上自衛隊だけでも、9.11同時多発テロの後の「テロとの闘い」、テロとの闘いを行うアメリカ海軍等に、補給支援活動、油や水を補給するという事で海上自衛隊は補給艦と護衛艦を約9年間に渡りインド洋に派遣しました。

そして現在でも、もう多くの方、忘れられているかも知れませんが、ソマリア沖・アデン湾で海賊対処活動。これは3年半になります。護衛艦を2隻、P-3Cを2機、ソマリア沖・アデン湾に派遣しております。こういう人的活動につながっており、やっと普通になりつつありますが、しかしこれでも、自衛隊を派遣するという事になると国会で「海外派兵ではないか」とか「武器はどうだ」とか、すぐそういう議論になってしまっていて、なかなかスムーズにいかないのが現状です。これでは国際社会に日本が互していくた



めには、まだまだ越えなければならないハードルがあるというふうに認識しています。

余談になりますけれども、ジブチに海賊対処で派遣されています護衛艦とP-3Cの激励のために、私、辞める前に、今からでは2年少し前ですけれども、6月に隊員を激励してきました。気温50度、夜の気温も30数度で日本人であればクーラーがなければ生活できないようなところ、何の楽しみもないところです。ここで、日本の代表として、海上自衛官だけではありません、陸上自衛官もいます。彼らは外国から極めて高い評価を得ていました。私が訪問したイギリス、フランスあるいは現地の各国の高官が口を揃えて言うのが、「自衛官は素晴らしい」と。「特別に選んでるの」ということです。決して特別に選んでおりません。この中にも自衛官の関係者の方もたくさんいらっしゃると思いますが、普通に育った子供たちを自衛隊に入れて、数ヶ月若干厳しい教育をただけで、外国に出せば、これだけ世界的に、国際的に高い評価を受ける日本の若者たちです。私にとってはこういう隊員が誇りでありました。やはりこれも一重に教育ではなかろうかと思えます。特別な教育をしているわけではありません。団体生活と厳しい時間に追われた生活。そして、若干肉体的に追い込んだ生活を数ヶ月送らせるだけです。これで、立派な自衛官に育つのが日本人の若者たち。日本人の素晴らしいDNAを引いていると思っております。教育の大切さを痛感しているところです。

このように高い評価を受けた海上自衛隊です。最近米海軍に言わせると、「米海軍と対等にオペレーションできるのは海上自衛隊をおいて他にない」ということです。アメリカ海軍は日本防衛のために必須です。逆にアメリカ海軍が西太平洋で行動するために海上自衛隊の存在は必須だというふうにも言えると思えます。

もう1つ、外交的な面で申し上げますと、海軍には外交的役割、警察的な役割、そして本来の防衛的な役割というのがあります。近隣諸国との防衛交流で必ず先駆けて交流の先陣をきるのは海上自衛隊でした。韓国とも、ロシアとも、そして現在中国とも、やはり防衛交流の先駆けは海上自衛隊です。これは海軍の伝統であるというふうに思います。これができるのが、海軍、海上自衛隊です。中国海軍との交流は後ほどまた申し上げます。このようにして成長してきた、そして実力を評価される海上自衛隊の今後の展望について最後に申し上げます。

展望を見た場合に、いろんな切り口があると思えます。例えば、装備はどうなるんだろうとか、空母は持つのか、原子力潜水艦は必要ないのか、あるいは規模はどうなんだ、あるいは運用はどうするの、海上保安庁との関係はどうなの等、いろんな切り口があると思いますが、1つだけ、中国海軍への対応ということで展望の1つを私の個人的な意見として最後に述べさせていただきます。

中国の海洋進出、あるいは一般的な海洋安全保障につきましては、後ほど太田さんと飯田さんの方から詳しく説明がございます。

中国海軍の近代化、拡充は皆様ご承知のとおりです。まずこれに対して一番重要なことは、私は、海上自衛隊がきちんとした実力を保有すること、質も量も確保された海上防衛力であるということが第一だと思います。中国海軍の艦艇等がどこに出てきても、必ず日本近海に来れば、海上自衛隊の飛行機も潜水艦も船もつきまとうということをできる能力

を保持する、かつ、この能力を中国海軍に認識させるために、日本近海、東シナ海などで極めて質の高い訓練を中国海軍に見えるような形で行うことです。これがプレゼンスにもなるし抑止にもつながる1番目のことだと思います。

2番目が、アメリカ海軍との連携というところです。アメリカは、中国の軍事戦略、海洋戦略を次のように評価しています。

中国は中国から言う第二列島線、日本の伊豆から、小笠原から、グアムから伸びるあの第二列島線の中には中国に脅威となる国の接近は認めない。これを「アンチアクセス」、「接近拒否」と呼んでます。そして、第一列島線、九州から、沖縄から、台湾からフィリピンへ抜ける第一列島線の中には一切敵は入れない。「エリアディナイアル」という戦略を中国はとっている。そのために中国は宇宙空間から、空中、海上、海中、はたまたサイバー空間に至るまでの戦力を保持しようとしているとアメリカは分析しています。これに対抗しようとするのが、アメリカが今模索しておりますが、ほぼ固まりつつある、エアシーバトル。エアシーバトルコンセプトという、聞かれたこともあると思いますけれども、アメリカがとろうとしている戦略です。

これはまだ確定はしていませんけれども、この方向で確立するのは間違いないと思います。詳細についてはまだわかりませんが、この中核を担うのはアメリカ海軍です。そして、アメリカの国防費が削減され、その中でも東アジアを重視しているアメリカの姿勢に対して、この西太平洋で有力な地位にある我が国として、これにきちんとした形で対応しないということは、今後の我が国の行く末を左右することだと私は認識しております。きちんとした対応が必要であります。そのために海上自衛隊としてもアメリカ海軍とよく協議をして、役割分担を議論し、任務と能力をきちんと理解しながら、何をやるべきかを考える。個人的には私は対潜能力と情報、監視、偵察、これに関する能力の向上だと思っておりますけれども、ここをきちんとやるのが2番目の重要なことだと思います。

そうしながらでも、一国だけではなく、やはり我が国としては近隣諸国、特にインド、オーストラリア、韓国、これらの国々の海軍と連携しながら、ある意味、中国包囲網を作るということも、もう1つ重要なことだと思います。

ただ、こういう中国に対する正面から向き合う対応だけではなく、もう一方において「軟」という、軟らかいという表現してはいますが、こちらの対応も当然のことながら必要です。それは、防衛交流、艦艇の相互訪問、人的な交流です。日中の艦艇の相互訪問につきましては開始以来4年目になっています。

中国の海軍のトップが、「呉・勝利」という向こう名でいくと「ウ・シヨンリ」という海軍大将ですが、1945年生まれですから66歳になる中国海軍にとっては極めて偉大な海軍大将だと思いますし、海軍士官としては尊敬できる海軍大将と二度、北京と東京で会いました。彼とは、正直言って本音で話し合えると思っています。呉・勝利大将は中国海軍の近代化の必要性をきちんと理解しながらどういう方向を目指さなければならないか、中国海軍の弱点もわかっている男だと思います。ある意味海上自衛隊に学ぼうとしているところもあります。人的な交流についてはお互いに合意しました。

「テーワ」という中国の練習艦が日本に来ました。そして、広島県の江田島、海上自衛

隊のメッカですが、ここに入り士官候補生同士の交流も行いました。防衛大学校の海上要員2名の乗艦実習もこの時に実現しました。こういう交流を続けながら、あるいは海上自衛隊が現在推し進めています若手士官の交流、このようなことを一方において推し進める必要がある。これが2番目です。

さらにはアメリカ海軍と協力して、中国海軍を良識のある海軍にするために、国際的な活動、例えば海賊対処、人道支援、あるいは災害復旧、これらの活動に引き込むことも重要です。中国は今、PKO活動等に非常に関心を持っています。別な思惑があつての活動だとは思いますが、そういう場を利用して列国海軍との交流を図って、中国海軍に今、南シナ海や東シナ海でやっている国際法とか国際慣例あるいは海のルール、マナーを無視したような高圧的な態度を戒めるような、良識のある海軍にすることが重要なことだと思います。そして、でき得れば我が方に有利な海洋安全保障の貢献に中国も巻き込む、このような一方における方策が必要だと思います。

外交交渉においては、片手で棍棒を持って話し合いをする、いわば片手で握手をするというのが定石のようです。海上自衛隊は外交交渉をする訳ではありませんけれども、正面で向かい合いながら、一方においては握手を求める、お互いの信頼醸成を図るための交流を図る。こういう硬軟両方の交流がこれから必要であろうと思います。それが1つの海上自衛隊の一つの展望になると私なりに思っているところであります。

最後になりますけれども、海上自衛隊の発展は帝国海軍と米海軍のおかげだということを申し上げましたが、忘れてはならないのは、草創期の世論の厳しい批判の中で、あるいは昭和63年に起きました民間の方30名が亡くなられた潜水艦「なだしお」と「第一富士丸」の衝突事件などでの厳しい社会からの批判の中で、黙々と任務を遂行してきた海上自衛隊全隊員の努力と汗、それを温かく見守っていただいたここにいらっしゃるような国民の皆様の支援のおかげであるというのは忘れてはならないことだと思います。

これから日本、海上自衛隊が真価を発揮するためには、真にアメリカ海軍と戦える海上自衛隊でなければならない。そのためには国として越えなければならないいくつかのハードルがあります。

私はここで「憲法9条を改正しろ」などということを声高に言うつもりはありません。

しかし、少なくとも集団的自衛権に関する見直し、これぐらいはきちんとやらないと、これをやらない日本政府の真価が、逆に問われることになるのではなかろうかと思っております。

海上自衛隊は今でも、すぐにでも真価を発揮できる態勢、能力を持っていると自負しております。後は政治のリーダーシップではなかろうかと思っております。数日前のアメリカのアーミテージ氏が読売新聞に書いていましたのもこのことだと思います。現役としてはなかなかこういうことは、当時の政府の方針と違うようなことは言えません。しかしこうやって皆様方に言えるのはやはりOBの責務の1つだと思っております。こういう機会を与えていただいたので、皆様方にも是非一人が十人に、十人が百人になるように、そして世論を形成するように協力していただければと思っております。

どうもご静聴ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

それでは、赤星先生の講演、そして第1部海上自衛隊60年を終了させていただきます。

ここで、約10分間の休憩をとらせていただきます。

第2部の開始は、15時10分とさせていただきますので、よろしく願いいたします。

なお、休憩時間中にお席を離れられる方につきましては、お手荷物に十分ご注意ください。さるようお願い申し上げます。

お手洗いは、この12階、エレベーター横にもありますが、10階のトイレは広く、数もございますので、こちらをご利用された方が混雑しないと思います。

また、10階には、飲料水の自動販売機もございますので、こちらもご利用ください。

15時10分、第2部を開始いたします。お時間に遅れないようよろしくお願いいたします。

(休憩)

【司会】

お戻りでない方もおいでみたいですが、時間となりましたので、ただいまから、当セミナー第2部「海洋と安全保障」を始めさせていただきます。

本セミナーのサブタイトルは、最初に私ども近畿中部防衛局長も申し上げましたが、「関西で考える〈海洋国家日本の安全保障〉」でございます。

古代から中世、近世を経て近現代に至るまで水上交通の要として繁栄し、また、たびたび我が国の実質的な首都として政経中枢機能をも果たしてきました、ここ水都・大阪と、大阪を中心とした関西圏は、海洋への出口、海洋との接点として、海洋とともにその繁栄を謳歌してきたと申し上げても過言ではございません。

海洋国家としての我が国の安全保障というテーマは、関西に住まい・生きる私たちにとって、まさに歴史的、宿命的な命題であり、また、それゆえに今日における海洋に関する安全保障上の諸問題についても大いに関心を持つ必要があります、また持たざるを得ないところでございます。

第2部では、海洋や安全保障に関してご見識の深い防衛省の教育・研究機関の先生方をお招きして講演していただきます。

まず初めに講演していただきますのは、防衛大学校教授で元防衛庁情報本部長・海将の太田文雄先生です。

太田先生は、昭和45年に防衛大学校を卒業され、海上自衛隊に入隊されました。

以後、護衛艦「ゆうぐも」艦長、米国国防大学入校、第1護衛隊司令、在米国日本大使館防衛駐在官、統合幕僚監部第4幕僚室長の要職を歴任され、平成13年に海将・統合幕僚学校長、同年情報本部長に就任されました。平成17年に海上自衛隊を退官され、同年、防衛大学校教授に着任され、今日に至っております。

この間、平成17年には、同校安全保障・危機管理教育センター長、平成21年には同

校国際教育研究官もお勤めになりました。また、現在は、兼ねて政策研究大学院大学連携教授も務めておられます。

本日は先生に、第2部のテーマと同じく「海洋と安全保障」について講演していただきます。

それでは、先生、どうぞよろしくお願いたします。

【防衛大学校教授 太田文雄氏】

ただいま紹介にあずかりました太田でございます。最初に申し上げたいのは、ここは中之島ってところですよね。北から来るには堂島川を渡らなければいけないし、南から来るには土佐堀川を渡らなければいけない。中之島にアクセスする方からみると、川は1つの障害になります。橋を渡らなければいけない。橋の数は限られているので渋滞する。

ところが、逆に川を交通路とみると、川は陸のように谷あり山ありではなくて、スムーズに動けますから、非常に滑らかに交通がやりやすいといえます。

導入でなぜこういうことを申し上げたのかと言いますと、日本は周囲を海に囲まれているために、天然の障壁に守られているとよく言われます。ただし、そこに有効な乗り物があって、天象気象が許せば、逆にアクセスする方はやり易いということになるのではないかとということなんです。

日本の有史以来を遡ってみますと、最初の国難というのは、私の知る限りでは、663年の朝鮮半島で起こった白村江の戦い後だと思えます。日本と百済の同盟軍対唐と新羅の同盟軍が戦って、日本側が完敗するんです。日本は水軍を失った後に、唐と新羅の同盟軍が海上を経由して我が国に侵攻するのではないかと心配します。

当時、日本の首都はここ難波、大阪だったんです。大阪はご存知の通り大阪湾に面していますので、来襲の船が来たら水軍を失った日本の首都は直撃されてしまう。したがって国防上の見地から、この大阪から滋賀の大津に遷都するんです。それと同時に、対馬・壱岐、それから讃岐といった要衝に城壁をこしらえて国防の備えを固めます。これが、最初の国難ではないかと私は思います。この教訓としては、水軍（海軍）を失った島国は国防上脆いということです。

第二の国難は、再び海上からアクセスしてきた元寇です、これ2回ありました。当時の鎌倉武士が非常に勇敢に戦ったということと、台風が来たという天象気象によって、我が国は国難から救われるということになりました。この教訓からいえるのは、悪天候は海上からのアクセスを制限するということです。

18世紀中頃から産業革命がヨーロッパで始まり、エネルギーが人力や風による帆船から汽船に変わります。そして自給自足体制からエネルギーとか、あるいは食料を海外から輸入していくという体制に替わってくると、これを運ぶための海上交通路が日本という島国の存続上、大切なファクターになってきます。これを防護するという意味で、海軍の役割が本土防衛ともう1つ、海上交通路の防衛というのが出てきます。

さて第三の国難は、ペリー提督の来航だと思えます。この時、江戸幕府が恐れたのは、4隻の蒸気船が東京湾を北上して、江戸に艦砲射撃を加えることだったのでしょいか。そ

れも確かにあったと思いますけど、海上交通路の遮断が一番大きなファクターであったと、当時の伊豆の菰山の代官で江川太郎左衛門という人の意見書に出ています。

当時の江戸は、人口100万ぐらいで、その食糧を運ぶために、当時は鉄道とか高速道路がありませんでしたから利根川や荒川といった川を使ったんです。同時に、それだけでは足りなくて海路を使いました。西からは黒潮に乗せて下田に集積する。それから北からも河村瑞賢という人が発見した黒潮の反流によって北からも食料を集積して、これを下田に集積しました。したがって、もしペリー艦隊が下田に居座ると、食糧の集積が閉ざされて江戸は干乾しになり米騒動が起こることは必至でした。ということから、できるだけ早くペリー艦隊に去ってもらいたかったのです。

ここで申し上げたいのは、海上交通路が、国の存続に対しては非常に大きな要素であるということです。特に産業革命以降、海上交通路の防衛が必要になってきます。

余談ですが、この近くに堂島先物取引所というのがあります。ここは1730年に開設された世界最古の先物取引所なんです。取引所は、その昔にロンドンにもベルギーにもあったんですけども、先物を扱ったのはこの堂島が初めてです。先ほど紹介がありましたが、私はアメリカの国防大学の学生でした。海外からの留学生はアメリカ全土を旅行するんですが、シカゴのBoard of Trade、先物市場に行った時、そこにいた人たちが「我々は大阪の堂島から学んだんだ」と言っていたことが記憶に残っています。

第二次大戦で日本が敗けた原因も、直接の原因は原爆、即ち戦略爆撃だったんですけども、やはり一番大きかったのはアメリカの潜水艦による商船の撃沈と、さきほど赤星さんからも話がありましたが、瀬戸内海にバラバラバラと機雷を撒かれてしまったことによる内航航路の遮断、これが効いてきたということです。

したがって、あとから申し上げますけれども、潜水艦と機雷というのは今でも海上交通路の脅威になっています。機雷の場合には一定の水深で、しかも動きませんので、限られた海域しか影響がないんですけども、潜水艦の場合には動き回りますので、大きな海上交通路に対する脅威になっています。

今では第二次大戦当時と比較にならないほどグローバル化が進んでおり、それに伴うエネルギー・食料の輸入と生産品の輸出が日本の繁栄の基盤であると言えます。

それでは、レジユメの第3番目に入りますけれども、地政学上から考察する安全保障、同盟戦略について考えて見ましょう。

距離という概念を考えてみますと、そこには地図上の実際距離と、時間上の距離と、輸送上の距離と、3つの距離があると私は思います。具体的に例を挙げて申し上げますと、この大阪から舞鶴、なぜ舞鶴かと言いますと私はかつて舞鶴の基地におりましたので。2番目は東京、それから3番目はサンフランシスコの距離を比較してみたいと思います。どこが一番近いか。地図上の距離から言えば、舞鶴が一番近いです。ところが、時間的なファクターを考えると、大阪から舞鶴までは急行でも3時間以上かかります。ところが今朝、私は東京から新大阪まで新幹線で来ましたが、3時間以内で来れる。飛行機を使ったらもっと早く来れるので、時間上の距離を考えると、この3つの中では東京が一番近い。ところが、何千万トンの小麦やとうもろこしを輸入する、あるいは何千両の車を輸

出する、といったときにサンフランシスコは海上交通路のコストの面という意味から一番安く、最も近いということが言えると思います。

これから何が言えるかですが、島国とかあるいは半島国家といった海洋国家同士は友好的な関係を構築する必要があり、とりわけ海軍強国と同盟すべきであるということが地政学上から言えるのではないかと。ちょっと質問してよろしいですか。世界最古の同盟は、どこどこの同盟でしょうか。はい、どうぞ。

(来場者： 英国とポルトガルです。)

はい、皆さん拍手。いつ頃から始まっていますか。

(来場者： 1300年ぐらいですか。)

そのぐらいです。1300年代から700年以上続いている。それはなぜかといいますと、島国である英国と半島国家であるポルトガルといった海洋国家は地政学上結びついて、大陸国であるところのドイツだとか、フランス、ある時にはスペインと戦ってきたということです。したがって、半島国家と島国という海洋国家は、同盟関係にあったほうが地政学上はよろしいという結果になるのではないのでしょうか。

近世に至ってからの例を挙げてみますと、日露戦争の時は世界最強の海軍国であったイギリスと日本は同盟関係があったがために、軍事物資が安全に海外から入ってきた。それから、遠路はるばるバルチック艦隊が回航するときに、イギリス海軍が、今でいうハラスメントをして、石炭を売らない、あるいは寄港を妨害したために、ヘトヘトに疲れたバルチック艦隊を日本海海戦でやっつけ、かろうじて大国ロシアに勝つことができました。

第一次大戦のときはどうか。当初イタリアという国は、大陸国のドイツ、オーストリアと同盟関係だったんです。ところが、途中から同盟関係から脱落して英仏といった連合側について。それはなぜか。当時のエネルギー源というのは石炭ですから、イタリアがそれを輸入するルートは地中海でした。その地中海の制海権を抑えていたイギリスやフランスを敵に回すことができなかつたという地政学上の理由からイタリアはドイツ・オーストリアとの同盟から脱落せざるを得なかつたのです。

第二次大戦のときの日本はどうか。これは海軍強国であるところのイギリスやアメリカを敵に回したため、物量的に敗北してしまったという教訓がでてくるのではないのでしょうか。そこで、現政権ではないですけども、東アジア共同体とか、あるいは日米中正三角論というのは、本当に日本の国益に合致しているのだろうかということを考えてみる必要があるのではないのかと思います。

そこで第4番目。実際に日本の安全保障にとって脅威は何でしょうか。これを既に申し上げました、国土防衛と海上交通路の防衛という2つの側面から考えてみたいと思います。

海上交通路防護というのは、先ほど言いましたように食料とかエネルギーの輸入だけではなくて、日本を防衛するための来援米軍がスムーズに来やすい状況を作るということも入ります。したがって、先ほど赤星さんが言ったように、中国はアメリカからみると、**Anti-Access, Area Denial** (アンチアクセス、エリアディナリアル)、接近阻止、領域拒否という戦略をとっている。それに対抗して何とか来援米軍を安全に我が国近海に近づけさせるということも、海上交通路防護の重要なファクターになると私は思います。

最初の国土防衛に対する脅威とは、日米同盟が堅固である限り、南西諸島の一部の島を除いて、現在のところ、大きな脅威はないのではないかと思います。

これにはパワープロジェクションとして、陸軍の兵隊を上陸させるためのエアカバー、即ち制空権を持たなければならない。そして、仮に陸兵を上陸させた後も、それを Sustain (維持)、即ち食糧や弾薬なんかを継続的に供給できる後方支援能力がないと奪取できない。そういった能力は、現在の中国人民解放軍には、日本本土に対して行える能力はないと思います。南西諸島のごく一部の島に関しては能力的にできるかもしれない。

北朝鮮は弾道ミサイルを持っていますけれども、陸兵を日本の本土に上陸させるという能力はありません。本土を攻撃する弾道ミサイルに対しては海上に浮かぶイージス艦が有効な防衛手段となっています。

第2番目の海上交通路に対する脅威でありますけれども、私が今、一番懸念しているのは、イランがホルムズ海峡を封鎖するかどうかということです。今、イランは核兵器の開発をしている。それに対して欧米諸国が制裁を加えるなら、イランはホルムズ海峡を封鎖すると言っています。イランの海軍司令官は水を飲むよりも簡単にホルムズ海峡の封鎖ができると言っているのです。2年前のちょうど今頃ですけれども、ホルムズ海峡において、アルカイダ関係のテログループによって日本のタンカーのM. S T A Rという船が攻撃を受けました。ちょうどこの真ん中が凹んでます。これはテロですけれども、ホルムズ海峡はなぜ重要なのかというと、日本のエネルギーの約80%はホルムズ海峡を通過しています。そこをもし封鎖されると、まさに今、原発がほとんど全部止まっているような状態で、石油だとか天然ガスが入ってこなくなるというおそれがある。この顕在化が今一番、私にとっては懸念しているところです。

海上交通路に関して、もう1つは海賊です。これは既に顕在化しております。この写真は、1999年に我が国の貨物船、アランドラ・レインボー号が、マラッカ海峡のあたりで海賊に乗っ取られて、それを追っかけているインドの沿岸警備隊の写真です。

これを契機に、日本は東南アジア、マラッカ海峡周辺諸国と一緒に、海賊を何とか少なくしようという試みを行います。それがレジュメにあります R e C A A P、Regional Cooperation Agreement on Combating Piracy and Armed Robbery against Ships in Asia。日本語で言うとアジア海賊対策地域協力協定です。これは2001年、当時の小泉首相が、多国間でこういう枠組みを作りましょうと16カ国に呼びかけ、現在締約国は17カ国になっています。そして情報共有センターをシンガポールに立ち上げて、海賊に対して有効に対処していこうとマルチの枠組みを構築しました。海賊が減少してきた要件は他にもあると思うんですけれども、この枠組みがかなり功を奏して、東南アジアにおける海賊の発生件数は、2003年からずっと減ってきています。

それに対して逆に増えてきているのが、ソマリア沖・アデン湾における海賊の件数で、今年に入ってちょっとこれが減ったというふうなニュースがありますけれども、現在も海上自衛隊の2隻の護衛艦と2機のP-3Cが行って、この対処任務にあたっています。これが2番目の脅威であります。

3番目は海上テロです。スクリーンはフィリピンを根拠地に置きますアブサヤフグルー



プというアルカイダと関係を持っているテログループが、スーパーフェリーを撃沈させたテロが2004年にあった時のものです。東南アジアにはアブサヤフグループ以外にもジェマ・イスラミアというインドネシアを中心としたアルカイダ関連テログループがあり、互いに交流しながらテロ技術の供与なんかを行っています。

日本のタンカーも危なかったんです。スクリーンは、ペルシャ湾の一番奥にあるバスラというイラクの石油積出港です。2004年の4月27日、ここで自爆テロ未遂がありました。狙われたのは、日本の日本郵船のスーパータンカー「高鈴」という28万トンの船です。これはアルカイダのグループですけれども、爆弾を持ってこれに突入しようとしたんです。ところがそれを阻止したのがアメリカ海軍と沿岸警備隊で、合計3人死んでいるんです。ともかく阻止したんですけれども、自爆テロの破片は「高鈴」の上甲板まで届いた。しかし人員の負傷はなかったという事案がありました。2004年というと私、情報本部長をやっております、私は2005年に定年になったんですけれども、定年前の人間ドックに入って下剤なんかを飲んで数分おきにトイレに行っているときに、某部長が入ってきて、「本部長大変だ、日本のタンカーが危なくやられるところだった」と報告してきました。当時、本件は新聞報道されておられません。ただし、総理大臣の耳には入っています。

情報本部長は最低月1回、総理大臣のところに報告することになっています。私は2001年の9・11テロ後から2005年まで4年やってきましたので40回以上、当時はずっと小泉総理だったんですけれども、ブリーフィングをいたしました。

最後は私の後に控えております飯田研究員のためのイントロダクションということですが、中国海軍の、潜水艦あるいは機雷戦能力の向上というのが、海上交通路の潜在的な脅威として押し掛かっているというのが現状です。詳細に関しては飯田研究員のほうから説明があると思うんですけれども、ここで2つ目の質問。日本の海上自衛隊は現在、何隻の潜水艦を持っているか知っている人おられますか。

(来場者： 16隻。)

はい、16隻というところです。その16隻を2001年から2005年までの間に、中国は造ってしまった。たった5年の間に日本の海上自衛隊が現在保有している潜水艦の数と同じ数の潜水艦を造ってしまった。さて、先ほど16隻と言いましたけれども、実際には一昨年暮れに、防衛計画の大綱というのができて、潜水艦の保有数は新しい数になりました。それが何隻だとかご存知ですか。

(来場者： 22隻。)

すごい、拍手。レベル高いですね、皆さん。22隻どこですか、22隻ここです。2006年から2010年までの5年間に中国はその22隻を既に造ってしまった。大変なペースです。建造のペースが増えてくると、活動も活発になってきます。スクリーンは過去10年間の存在が判明している中国潜水艦です。潜水艦というのは海面下を潜って動きまですから、我々の目には普通はわからない。

しかし、例えば火災などの事故を起こして、あるいは国際海峡を通過するときなどには浮上しなければならないときがあります。そういうときは「あそこに中国の潜水艦がいる」

というのがわかるんです。それをプロットしたのがこれです。ほぼ10年前、2003年5月に明級潜水艦というのが渤海湾で火災を起こして乗組員全員が死亡する事故が起きました。同じ年の11月に、大隅海峡を同じ明級潜水艦が浮上して通過しました。

2004年、これは私が未だ情報本部長の時ですけれども、11月に漢級という中国の原子力潜水艦が石垣島と宮古島の間を通過して日本の領海侵犯を行った。

このとき海上自衛隊は、戦後2回目の海上警備行動を発動したんです。第1回目はいつ発動したかご存知の人いますか。1999年3月に、能登半島沖で北朝鮮の不審船が出たときに1回目を発動しています。このときは向こうの逃げるスピードが速いものですから海上保安庁の巡視船が追っかけきれない、それで海上自衛隊が追跡した。

2回目がこの領海侵犯事案です。2005年に南シナ海で、明級潜水艦が火災を起こして浮上する事案がありました。2006年、宋級潜水艦が沖縄沖で訓練をしていたアメリカの空母「キティホーク」の鼻先に潜望鏡を上げた事案がありました。魚雷の発射距離内にです。2007年、ここに海南島というのがあるんです。この海南島に晋級という最新の大陸間弾道ミサイル搭載原子力潜水艦が入港します。写真がそうなんですけれども、この海南島に、潜水艦が出入港してもわからないような地下基地ができています。通常、潜水艦が出港すると、偵察衛星で出港したのがわかるんですけど、それがいつ出港したのかわからなくする地下基地ができています。

これが当時入港した晋級SSBN、大陸間弾道ミサイル搭載原子力潜水艦です。当時、米空母キティホークが11月のThanks Giving Holiday、勤労感謝祭を香港で家族と過ごそうと、横須賀にいる家族を香港に呼んで入港しようとしたところが、中国政府が「入港したら駄目」というふうに断ってきた事案がありました。それではしょうがないと、台湾海峡を北上して日本に帰ろうとここまで来たときに「入港してもいいよ」と言ってきた。それはなぜか。新聞報道では、米国がチベットの指導者ダライ・ラマを招いたとかいろいろなことを言っていましたが、私はこの晋級潜水艦がここで演習をやっていたので、空母機動部隊に音の特徴を取られてしまうからだと思います。潜水艦にとっては、音によってどういう艦かわかりますが、これを音紋と言います。人間の指紋と同じように、音紋を取られてしまう。ここまで行ったときに「帰ってきてもいいよ。」と中国が言った理由は、その時点で晋級潜水艦の訓練が終わって、既に三亚に入港した後だからだろう、と私は思いました。当時の太平洋軍司令官をやっていたキーティング海軍大将 (Admiral Keating) とは非常に仲が良かったので、「僕はこういうふうに思うんだけど、どうか。」と聞いたら、「Your estimate is correct」、的中しているという回答がありました。これは2007年のことでもあります。

次は2008年。皆さん覚えておられるかどうかわかりませんが、当時のNHKニュースの昼のトップニュースで、四国と九州の間の豊後水道に、「Unknown Submerged Object」、潜水艦らしいものを発見したというニュースが出ました。仮にこれが中国の潜水艦だとしたら、消去法で推測するに、宋級潜水艦ではなかろうかと私は思います。

2009年、「ジョン・S・マケイン」というアメリカのイージス艦が、音響を探知するために艦尾からソナーをぶら下げている、その曳航式ソナーにどこかの潜水艦、南シナ

海ですから中国に決まっていると思うんですが、意図的に当たってきた事案がありました。フィリピンの西方海域です。

2010年、これは明らかに浮上した潜水艦が、沖縄と宮古島の間を2隻通過しました。これはキロ級と言って、ロシアから購入したかなり静かな潜水艦です。同じく2010年の秋、商級潜水艦という最新の攻撃型原子力潜水艦が海南島に配備されました。大陸間弾道弾搭載原子力潜水艦の晋級自体は敵潜水艦の攻撃能力はありません。攻撃するとしたらアメリカのワシントンとかサンフランシスコを攻撃するんですけども、それを護るための原子力潜水艦である商級2隻が配備された訳です。

そして2011年、昨年ですけども、東シナ海に元級潜水艦という、これは在来型潜水艦とは違う、原子力潜水艦とも違う、空気独立推進式という潜水艦で、かなり静かな潜水艦ですけども、それが東シナ海に浮上しているのが発見されました。

潜水艦は先ほど言いましたように、存在は我々には普通はわからない。ところが偶々何らかの事象で浮上したときにだけわかる訳ですから、これは氷山の一角で実際の活動は、恐らくこの10倍ぐらいあると考えてよろしいのではないのでしょうか。

先ほど、赤星前海幕長が言っていた第二列島線というのがここです。ここから第一列島線までの間に米軍が入って来るのを何とか阻止しよう、第一列島線から内側には絶対入れない、その大きな手段というのは潜水艦です。他にもう1つ弾道ミサイルがありますけれども。したがって、中東から油を運んで日本に届ける重要な海上交通路、それから何かあった時に米軍が来援して来る重要な海上交通路の海域に、中国の潜水艦がウヨウヨしているということが判ります。

私の話は次の飯田さんの講義の導入ということで、ここで止めたいんですが、あと若干の時間があります。フラストレーションしている方がおられるかもしれませんので質問を受けたいと思います。

#### 【質疑応答】

司 会： 先生に何かご質問のある方、挙手をお願いいたします。

来場者： 先ほどおっしゃいました、中国で建造されている潜水艦の数、かなりの数をおっしゃっていましたが、あれは全部原潜ですか。

太田氏： いえ、違います。宋級のような在来型潜水艦も数の中に入っています。商級や晋級は原子力潜水艦ですけども、在来型も入っています。他にありますでしょうか。

来場者： 中国の潜水艦、かなり高度な兵器ですけど、中国が建造しているその場所はどこなんですか。

太田氏： 潜水艦建造造船所は数か所あります。在来型潜水艦を建造しているのは上海に近い数箇所ですが、北の方では渤海湾の造船所で原子力潜水艦を建造しています。

来場者： 都市で言うとどこになるんですか。

太田氏： 上海、武漢、それから葫芦岛市です。数か所あります。他にございますか。

来場者： 2008年の豊後水道に中国の潜水艦らしきものがそこまで近づくまで日本は探知できなかったのですか。

太田氏：　そうです。

来場者：　それは当たり前なんですか。アメリカの潜水艦であっても隠れて侵入は可能なんですか。日本の国内に。

太田氏：　これは、潜水艦を探知するためにはどうするかということなんですけれども、同じ海面下にセンサーを入れて、それで潜水艦の発する音で探知しなくてはいけません。ソノブイを撒くとか、あるいは他のセンサーがないといけません。このときは探知できていません。

アメリカの原子力潜水艦に関してもそうです。アメリカの原子力潜水艦があそこまで入るということは可能ですし、それを探知する術はありません。何らかの情報があって、ここにどうも潜水艦がいるらしいことが判れば、赤星君がいた航空部隊のP-3Cとかがソノブイを撒いて探知するということはありますけれども、何も情報がないところではよくわからないというのが実情です。他にございますか。

来場者：　中国の潜水艦の隻数というのはどれぐらいあるのでしょうか。

太田氏：　約55隻です。そのうちの約十隻が原子力潜水艦です。他に、どうぞ。

来場者：　日本近海、領海に中国船とかそういうのが入ってきた場合、日本の防衛省はこういう対処をするようになっているんですか。

太田氏：　領海に入ってきたら領海侵犯になります。

来場者：　どういう対処をするようになっているんですか。

太田氏：　対処は、最初から爆雷かなんかで攻撃することはできません。最初は発音弾を出して「うちがあんたを掴んでます」と。発音弾を出せば、向こうもわかりますから。実際に2004年11月のときは発音弾を投下して中国の漢級潜水艦には知らせています。しかし即武力行使はできません。海上警備行動、あるいは防衛出動がかかって、武力行使をやっても良いという政府判断がない限り、独自に武力行使はできないことになっております。1981年にソ連のウイスキー級潜水艦がスウェーデンの領海内に座礁しましたが、この時スウェーデン政府は即爆雷攻撃をしました。しかし日本は防衛出動がかからない限り攻撃できません。はい、どうぞ。

来場者：　今、中国の海軍基地というのは、旧日本海軍の跡をほとんど現在使っているんですか。

太田氏：　青島は確かに第一次大戦の後、一時日本が占領して使っていましたが今の海軍基地は中国が造ったものです。それ以外の東海艦隊司令部の寧波や南海艦隊司令部の湛江、これは日本が作ったところではありません。

来場者：　上海はどうですか。

太田氏：　上海は造船所はありますけれども、海軍基地はありません。

来場者：　上海は造船所。

太田氏：　造船所はあります。

来場者：　やっぱり今使っているわけですか。海軍施設を。

太田氏： それは日本が作ったかどうか。今、中国海軍が使用している造船所は日本が作ってないと私は思います。

来場者： 海南島はどうですか。

太田氏： 海南島の海軍施設に関しては日本が作っておりません。彼らが独自に作りしました。特に最近になってから海南島を整備しています。なぜかという、南シナ海というのは彼らにとってプライオリティが高いんです。

来場者： 海南島は海軍の陸戦隊が大分おられたのではなかったですか、かつて。

太田氏： 海南島に関しては第二次大戦中に陸戦隊がおりました。しかし、当時これほど大きな海軍基地はできていなかったです。

それでは以上で、どうもありがとうございました。

#### 【司会】

先生どうもありがとうございました。

活発な質疑もできまして、もう一度先生に盛大な拍手をお願いします。

ここで約10分間の休憩とさせていただきます。

次の第2部後半の講演は16時5分から開始したいと思いますので、お間違えのないよう、よろしくお願いいたします。

(休憩)

#### 【司会】

予定の時刻になりました。これより、第2部「海洋と安全保障」の後半を始めさせていただきます。

後半は、防衛研究所北東アジア研究室主任研究官の飯田将史先生に「中国の海洋進出とその背景」という演題で講演していただきます。

最近における中国の経済発展はめざましく、昨年はGDPで世界第2位に躍り出、また我が国にとっても輸出入ともに最大の貿易相手国であり、関西の企業や消費者にとっても、今や中国との密接な関係なくしては産業や生活は成り立たない状況にあると思われま

す。一方で先ほどもお話がありましたが、依然として不透明な著しい軍事費の伸び、新たな兵器開発の動き、領土問題に関する高圧的ととれる対応など、安全保障面での懸念材料は少なくありません。

中でも、我が国近海や外洋への中国艦船の航行等に見られるように、海洋における主張や行動の活発化についてはその動向を注視せざるを得ません。

本日は、このような中国による海洋進出の現状とその動向をいかにとらえたらよいのか、お話を伺いたいと存じます。

講演に先立ちまして、講師の飯田先生のご経歴を紹介いたします。

飯田先生は、慶応義塾大学総合政策学部を卒業された後、同大学大学院政策メディア研究科修士課程を修了、同研究科博士課程で単位を取得された後、スタンフォード大学東ア

ジア研究科専攻修士課程を修了され、平成23年には、同大学東アジア研究センター客員研究員となられておられます。

この間、平成14年に当時防衛庁のシンクタンクである防衛研究所に入所され、現在は、地域研究部北東アジア研究室主任研究官として中国の外交・安全保障政策、東アジアの国際関係を専門分野として活躍されています。

去る2月に発刊されました防衛研究所の「中国安全保障レポート」の執筆も担当されておられます。

それでは、飯田先生、よろしくお願いいたします。

**【防衛研究所北東アジア研究室主任研究官 飯田将史氏】**

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました防衛研究所の飯田でございます。このたびは、これだけ多くの方に、私の日頃の中国に対する見方というのを知っていただく、共有していただくという機会を与えていただきまして本当にうれしく思っております。ありがとうございます。それから大阪という場所で開催していただいたというのも、非常に私感謝しております。私ずっと横浜生まれ横浜育ちなんですけど、実は阪神タイガースのファンでして、ここに来れば、阪神百貨店に行ってグッズ買って帰ると、そういうチャンスもありますので、非常にそこは二重に感謝しております。

本日は「中国の海洋進出とその背景」ということで、なぜ中国が南シナ海や東シナ海、さらには西太平洋というところに進出しているのか、その背景、彼らの考え方、それからその現状といったもの、そしてそれが最後に日本が位置します東アジアの安全保障というところにどのような影響を及ぼすのかということについてお話したいと思うのですが、45分しかないということで、早口になってしまうかもしれませんが、お許しいただければと思います。

さらに私、防衛研究所からきていまして、防衛研究所の多少の宣伝をしなければならぬということもありまして、入口のところに茶封筒で防衛研究所の紹介資料を若干置かせていただいております。先ほどご紹介あったように、いくつか出版物を出しております。私が直接両方関わっているのですけれども、最近始めたのが中国安全保障レポートということで封筒の中に1枚紙で、今年度の安全保障レポートについての概要を紹介させていただいております。ご興味ある方はご一読いただいて、さらにご興味ある方は、その内容については、防衛研究所のホームページに、全部PDFで無料で公開されておりますので、是非そこまで見ていただければと思います。

それからもう1つが、東アジア戦略概観と申しまして、もう16年目になるのですけれども、毎年、東アジア、中国だけではなくて朝鮮半島とか、東南アジアとか、そういったところも含めたこの地域の安全保障環境について防衛研究所の私も含めて、研究者の立場でどのように観るのかということについて情報発信させていただいているということでもあります。その他いくつか資料がありますので、ご覧いただければと思います。これで私の義務の半分は終わったわけなのですが、これから本日のお話という中に入っていきたいと思っております。

中国人民解放軍というのは、非常に特殊な軍隊であります。自衛隊とか米軍とかと違う。何が違うのか、それは国家の軍隊ではないということが最大の特徴であります。では誰の軍隊なんだといえば、それは中国共産党の軍隊ということです。つまり、中国共産党のために働く軍隊というのが人民解放軍ということであります。そうであれば、人民解放軍というのが何を今ミッションとして与えられているのか、人民解放軍の使命とは何なのかというのは誰が決めるのか、それは国民とか国会とかではない、当然それは中国共産党ということなのです。

このスライドに最初にお出ししているのが、「新世紀新段階における軍隊の歴史的使命」というなんだかちょっとおどろおどろしいタイトルですけれども、これは、中国共産党に中央軍事委員会という組織があります。中央軍事委員会というのが、人民解放軍のいわゆる統帥権を持っている。その中央軍事委員会の主席というのが胡錦濤さんです。胡錦濤さんというのは共産党の総書記、つまり共産党のトップでもあり、中国の国家主席、国家のトップでもあり、そして中央軍事委員会の主席ということで、軍のトップでもあるわけです。

いずれにしても、胡錦濤さんが、2004年の年末、12月に重要な演説をします。それがここに書いてある「3つの提供、1つの発揮」と言われるものであります。これはどういうことかということ、簡単に言えば、胡錦濤さんが人民解放軍に対して、これからの君たちのミッション、使命というのは4つある、「3つの提供、1つの発揮」というふうにそれはまとめることができる。そういう話です。ではまず最初1つ目の提供というのはなにかということ、「党が執政地位を固めるための重要な力の保証」を提供しなさい。簡単に言ってしまうと共産党政権を支えろと、力を以って支えなさい、これが第一の提供、最大のミッションといっても間違いのないと思います。

ちなみに中国共産党の指導部のどういう状況認識がその背景にあるのかということ、これはその演説の中、もしくはその演説を巡ったいろいろな論説の中でも出ていますけれども、西側敵対勢力による中国弱体化の戦略というものが存在している。国内外の敵対勢力による共産党政権打倒の企てがあるんだということを彼らは認識している。本気で信じているんでしょう。そういう認識があるからこそ、人民解放軍が、共産党打倒勢力を力をもって粉砕しろというのが第一の使命ということなのです。

それから第2番目、「国家発展の重要な戦略的チャンスの時期を守るための堅強な安全保障」を提供しなさいということなのです。この重要な戦略的チャンスの時期というのはなにかということですが、2002年の第16回党大会の政治報告の中で初めて出てきた考え方ですが、当時、今から10年前ですけれども、21世紀の初めの20年間、つまり2020年まで、この時期というのは、中国の発展にとって得難いチャンスの時期であると彼らは定義したわけです。

なぜ得難いのか、1つには長期に安定した国際環境を得られる、そういう可能性が高い、つまり中国が巻き込まれるような大きな戦争が、この20年、つまり2020年までは起こらないであろうということ、それから経済のグローバル化が進んで、中国の経済発展にとっても良い状況が生まれる。10年前の共産党の大方針としては、この20年間は経済

発展に集中する。そういったことによって中国の国力を最大限にこの20年間を使って高めようというのが大きな方針だったわけです。

ただその20年間の中国にとっての安定した国際環境、社会環境というのは、中国の認識によれば、台湾独立運動だとか、主権や領土の問題だとか、チベット等の民族分裂の問題、それからテロリズム等々、こういった問題によって破壊されてしまう可能性がある。だからこういったものを人民解放軍の力でもって押さえつけなさい、というのがこの第2のミッションということになるわけです。

それから興味深いのが、この第3点、3つ目の提供ということですが、**「国家利益を守るための有力な戦略的支え」**を提供しなさいというわけです。これが3つ目の提供ということですが。

ここでいう**国家利益**というのが問題というか興味深いところで、胡錦濤さんの演説の中での表現というか言い方ですが、今中国にとっての**国家利益**、中国が守らなければいけない**国家利益**というのは、その内容においても、それにもし**地理的な範囲**が関係するとすれば、その**地理的な範囲**についても、拡大しているんだということを言っております。

つまり、いわゆる伝統的な領土とか、領海とか、領空、こういったものの防衛というものだけでは、もはや中国の**国家利益**を守ったとは言えない。中国の国力の発展、経済のグローバル化、そういったものに伴って、中国にとって守らなければいけない**国家利益**というのは、海洋とか、宇宙とか、電磁空間とかといったところにも拡大しているんだということです。

そしてこの拡大している、拡大しつつある、**国家利益**を守るための有力な戦略的支えというのを提供せよというのが、胡錦濤さんが人民解放軍に対して与えた3つ目の使命ということですが、ここら辺がこの後の話、海洋等々の話につながってくるわけです。それから4つ目に1つの発揮ということ提起されたのが、**「世界平和を守り共同发展を促進するための重要な役割」**を発揮しなさいということですが、これには、実は二面性があります。1つには先ほどのお話の中でも若干ありましたけれども、例えば、ソマリア沖・アデン湾での海賊対処活動、こういった**平和協力**というか、国際貢献的な側面というものにも人民解放軍は役割を果たしなさいという、我々から観れば積極的な側面があるということも押さえておく必要があるんですが、もう1点重要なことが、ここでいうこの**平和の定義**というのが、基本的に我々と異なっているというのが重要な点です。つまり中国側は、たしかに**中国経済**というのは**グローバル経済**というものと一体化しているということで、安全保障の面も含めて、**国際社会と共通利益**というのが拡大しているという観点も持っているのですが、他方で中国側は、今の**国際社会**というか**国際安全保障秩序**というものに対して非常に**ネガティブな考え方**を持っています。

つまり中国は、現状は先進国と途上国が対立する可能性があるんだと考えているわけです。中国から見ると現状の**国際システム**というのは、**アメリカを中心とした既存の大国**が**独占的に決めている**ものであって、**中国を中心とした新興大国**だとか、**発展途上国**にとっては**不利なルール**であると認識しているわけです。ですから、中国からすると、今我々が直面しているような様々な問題というのは、その多くが実は先進国の、彼らの言葉で言え



ば横暴というか、先進国が引き起こしているんだと。だからその国際秩序自体を変えなければ、世界平和は達成されない。そういう論理ですから、結論としては、途上国を代表する中国が軍事力を増強することが世界平和の維持につながるんだという、そういうロジックを彼らは今背景として考えている、という点を認識しておく必要があるんだろうと思います。

今まで、彼らの基本的な考え方というものについてお話してきたわけですが、その中から容易にわかるように、彼らの安全保障上の関心というのはどうしても海洋というところに繋がってこざるを得ないという点が、これから次の話になってくると思います。

これは中国が直面する主権問題ということで、尖閣の問題は我々の立場からすると主権問題でもなんでもありませんが、問題は彼らがどう認識しているのかということですので、一応入れておきますけれども。既に陸上国境の問題というのは、ほとんどすべて解決している。インドとの間での陸上国境の問題だけは残っているわけですがけれども。

今、中国が主権問題として抱えているものは、その多くが海洋にあるんだということです。そもそも論として、中国から見て、国防、領土の防衛、領土の保全という観点からいくと、彼らの関心というのは自ずと海に行かざるを得ないということです。

台湾の問題というのは一番大きいいわゆる核心利益の問題と言われているわけですがけれども、我々が関わるころと言え、東シナ海における尖閣の問題、それからEEZの境界の問題、こういったものがあるし、さらに今一番、今日のお話でもこれからメインになるわけですがけれども、一番ホットな中国の活動が活発になっているのが南シナ海ということです。

こういったところに中国は非常に大きな利益と関心とそれから安全保障上の動きというのを集中させてきている、ということだと思います。あまり時間がなくなってしまうので、簡単にここはいきますけれども。

第一、台湾の問題というのが、なんととっても中国にとってもっとも安全保障上、重要な問題にはなっていると思います。台湾というのは、中国共産党から見れば、自分たちが一党独裁体制を中国で継続していくための非常に重要な理由になっているわけです。いわゆる統治の正当性といいますけれども。つまり中国というのは、まだ統一されていないと、統一を実現することが、中華民族の偉大な復興につながるんだと。それを実現する責任を持ち、能力を持ち、実行する意思をもっているのは、中国共産党だけである。

つまり台湾の問題を解決するために、中国共産党の統治・支配が必要なんだということで、国民にある意味今のような権威主義的な一党支配体制を受け入れさせているという理由があります。それはその正当性ですけれども、まさにそうであれば、この問題で自分たちのこれまでの主張と矛盾するような対応、もしくはいわゆるナショナリズムの要求に応えられないような対応というのを採ることは、それは中国共産党の支配体制というものに大きな打撃を与える可能性があるわけです。ですから、まさにこれは中国共産党にとっていわゆる核心利益の第一の問題になるということです。

ただ、台湾というのは、中国からみれば当然そのバックにアメリカ、米軍がいるわけで、台湾だけを相手にしているというわけにはいかない。さらにいえば、そのアメリカは日本

と同盟関係にあるわけで、やはり日本の存在というのも考えていかなければいけないわけです。簡単にこれは解決できる問題ではないということで、中国は今ある意味時間稼ぎをしていると思います。

アプローチとしては2つあります。1つは平和的なアプローチということで、特にこの数年、台湾で馬英九政権ができた後、経済面での交流を深める形に今進んでいます。それと同時に、台湾に対する軍事的な圧力も継続して強化しているわけですし、ミサイル配備とか演習とかをやっているわけです。ただ先ほど申し上げたように、最終的にこの台湾の問題を解決しようとするれば、どうしても米軍のいざというときの介入は念頭におかなければいけない。これは赤星海幕長のお話にもあったように、やはりそこはいわゆるA2/A Dという考え方というのがそれで出てくるということです。

ただ、米軍に対してのA2/A D能力というのは、そう簡単につかないということで、今はそれを着々と整備しながら、時間を稼いでいるというのが、おそらく台湾問題に対する彼らの基本的なアプローチになるんだろうと思います。

次に尖閣、それから次の東シナ海の問題にくるわけですがけれども、この問題は非常に最近注目を集めて、皆さんも日々ニュース等々で見ているところだと思います。中国は、70年代から尖閣に対する主権を主張するようになったんですが、基本的には彼らがいうところの「論争棚上げ、共同開発」ということ、これは南シナ海でも同じ基本的なスタンスをとっていると彼らはいっていますが、ただその前提というのは、主権は中国にあると、主権は我にありというのが、その前提の下で論争を棚上げしてやるから共同開発しようというのが基本的なアプローチです。ここ数年になってだいぶこの主権は我にあるということを表だって言うようになり、またそれを実際の行動をもって主張していく、そういう動きになっているということだと思います。

例えば2008年に中国の海監、後で若干説明しますがけれども、海監という、海軍ではないですけど、海上のパラミリタリー、准軍事組織がありますけれども、その船が領海を侵犯したり、これもご記憶に新しいと思いますけれども、2010年の9月に、中国の漁船が海上保安庁の船に2回衝突して船長が逮捕されるというようなことがありましたけれども、その後の非常に強硬な中国側の姿勢というのが我々の印象に残っているし、基本的にその路線というか考え方というのが今でも変わっていないということだと思います。

それからもう1つ大きな問題として、この東シナ海のEEZの境界確定の問題があります。この問題の簡単な説明ですが、東シナ海があるわけですが、日本の領海基線と中国の領海基線からそれぞれ200海里を引くと非常に多くの部分が重なるんです。日本側から引くと大体こちら辺に日本の主張する200海里がきて、中国側は200海里プラスこの沖縄トラフというところまでが、大陸棚、自分たちの大陸棚だから管轄権が及ぶんだと、こういう主張でずっとぶつかってきて、話し合いがもたれていたわけですが、2008年6月、その前の月に胡錦濤さんが日本に来まして、この問題で日中は1つの合意に至ります。これは共同プレス発表として、6月に発表されているんですが、ポイントは2つあって、1つは共同開発区を設定しましょう。ポイントは、この共同開発区がどこに設定されたのかということです。共同開発区は実は日本側が主張する日中中間線を跨いだこ

の地域に設定されました。

それからもう1つのポイントは、日本名で「白樺」、中国では「春暁」といいますけれども、そのガス田について中国の法律に基づいて日本の企業が開発に参加するというのが第2のポイントです。ちなみにこの白樺というのは、日本が主張する中間線の若干中国側にあります。この2つの合意が、何を意味するのかというところについては、いろんな議論があるわけですが、私の理解するところ、この合意ができる前提として、明確な合意ではありませんけれども、やはり日中中間線の存在というのを、双方が意識しているはずで、それがなければここに共同開発区域を設定するという事で双方が合意するわけではないわけです。

つまりそれでいけば、実はこの合意というのは、日本の主張にかなり沿った合意だったと思います。そう思ったのは私だけではなくて、中国の多くの国民も実はそう思って、その後結局この合意を実行に移すに当たって、中国国内でものすごい強い反発があって、2010年の先ほどの漁船衝突事件というのを契機にして、中国側はこの交渉をずっとサスペンドしてしまったということになります。最近になって、中国は東シナ海での主権主張活動というのを非常に強化してきております。漁政によるパトロールというのが、2011年の8月にあったり、それから人民日報の国際評論コラムがあるんですけども、その中で尖閣問題に対する日本の対応を批判しながら、中国の核心的利益に挑戦することは許さんというようなコラムが出たりということで、いわゆる核心的利益という言葉と尖閣の問題をリンクし始めるような認識というのでも生まれてきているということです。

それから、海上保安庁の調査船「昭洋」というのがいるんですけども、今年の2月、ここら辺の海域、つまり日中中間線よりも日本側、我々の立場からすれば明々白々日本のEEZの中ですけれども、そこで調査活動していた「昭洋」に対して、海監、中国側のパラミタリーの1つですけれども、その海監の航空機と船が、「昭洋」の航行を妨害したということです。

この写真は中国がリリースした写真です。日本の「昭洋」を上空から撮っているということで、つまり、邪魔しにきた海監の固定翼の飛行機ですけれども、飛行機から撮ったということで、彼らの行動の内容、レベルというのが高まってきていることを示していると思います。今、東シナ海ではそういう状況ですが、さらに強いプレッシャーというのを受けているのが、東南アジア諸国ということです。南シナ海の問題ということになります。

南シナ海の問題を簡単に振り返るといってかご説明しますが、そもそも南シナ海というのは中国の南部からインドシナ半島、それからマレー半島、フィリピン諸島、ここに囲まれた海域です。この海域の中にいくつか島、島のグループがあるわけです。有名どころが、ここら辺にあるパラセル諸島、中国語で言うと西沙諸島、それからここら辺にありますスプラトリー諸島、中国語で言うと南沙諸島というところですけども、その他ちょこちょこいくつかあるんですけども、後からお話しますが、ここら辺にあるスカボロー礁というのが今年非常に問題になったわけですけども。

いずれにしても、その中の島々の領有権、それからそれに付属する領海、さらに海洋の

管轄権、海洋権益を巡る管轄権というものを、中国だけでなく台湾、ベトナム、それからマレーシア、ブルネイ、フィリピン、この6者が争っているということです。この図は全くこのとおりというわけではないんですけども、概念として、中国はこの南シナ海ほぼ全域にわたって自分たちの、この先が難しいのですが、領海とは言っていないですが、自分たちの伝統的な海域であるということで、簡単に言えば、基本的にこの中の海洋権益、領土もそうですけれども、海洋権益等々については中国の管轄権の下にあるんだという主張です。

ちなみに、同じ主張を台湾はしているわけですけども、台湾と中国は、こういう海域について、彼らの主権的権利というのを主張している。他方でベトナムも、ほぼこの紫のところですけども、全域にわたっての同じような主張をしているし、マレーシアはこの緑のライン、このボルネオ島の沖辺りについて主張していますし、フィリピンは、この青いライン、ここについて主張している。ブルネイは、小さい国ですけど、自分の領海基線から200海里の部分について同じような主張をしているわけですが、一見してわかるように、この6者の主張は非常に入り組んでいて、これを見ただけでも解決というのはほぼ不可能なのではないかというくらいですけど、ここを巡って最近中国が、特にここ3年くらい、その他の主権主張国に対して強硬な姿勢を採ってきているということが今大きな問題になってきているということだと思います。

南シナ海で、中国が非常にビジブルに、目に見えるように、強硬な姿勢を採ってきている。特にフィリピンとベトナムに対しては、実際に彼らの調査活動を妨害するような行動まで起こしているということです。

昨年と言えば、ベトナムの調査船の探査ケーブルを切ったりということもしているということで、非常に警戒感が高まっているということです。さらに、今年になって今までになかったレベルというか、ある程度の緊張状態というのも起こりました。

今年の4月10日ぐらいだと思うんですが、ちょっと地図が小さくて申し訳ないんですけども、このルソン島の沖ですか、これが百何十キロだったと思うんですが、フィリピン側は、ここにあるスカボロー礁と、彼らの名前と言うとパナタグアイランドという名前ですが、そこについて彼らは主権を持っていると主張しているわけです。上空から撮るとこういう感じのいわゆる環礁というものです。

ここに中国の漁船がこの中に入って、8隻ぐらいだったと思うんですけども、中国の漁船がいた。それを飛行機で見つけたフィリピン側は、近くを航行していたフィリピン海軍の船、フィリピン海軍の船といっても元々はアメリカのコーストガードの船を払い下げという言い方がいいかわかりませんが、供与したのか、売却したのかわかりませんが、それをもらって配備した。

それでもフィリピン海軍の中では最大の船ですけども、この船がここにやってきて、そこにいた中国側の船を臨検したところ、ウミガメだとか、珊瑚だとか、フィリピンの法律では取ってはいけないものを取っていたということで、取締りを行っていたところ、中国の海監の船が2隻やってきて、中国の漁船とフィリピン海軍の船との間に割って入って、中国側の漁民を救出して、その後ずっとフィリピン側と中国側の船と船のいわゆる対峙、

にらみ合いというのが始まったんです。フィリピン側はすぐに海軍の船を引きあげて、代わりにコーストガードの船をこの海域に送ったんですけれども、その後、ずっと中国は、しばらく海監の船がいて、その後、漁政というもう1つの海洋法執行機関といわれるものの船が加勢してきて、都合3隻とか、場合によって4隻という時もあったらしいですけれども、中国側のパラミリタリーの船数隻とフィリピン側のコーストガードの船が実は2ヶ月にわたってにらみ合うという状態が起こっております。

これまで、ここまで長期にわたって船と船同士が対峙するという事態は起こっていませんでしたので、この数年の流れから見ると、もうワンステップ中国側の行動というか彼らのこの問題に対するポジションというのは強化されてきているというふうに見てもいいのかと思っております。

南シナ海に関しては、今まで何回か言及してきました海監とか漁政とかいったパラミリタリーだけではなくて、中国海軍もさまざまな形、とりわけ訓練を通じて、この海域でのプレゼンスを示してきているということで、簡単にご紹介します。これは2010年の7月ですが、中国海軍、南海艦隊を中心にして、中国海軍が、彼らの説明によれば、海軍史上最大規模の実弾演習を行ったと言われております。16種類71発のミサイル発射ということで、配信された写真としてはこういうものでやっているということです。これは、陳炳徳総参謀長も視察して訓示するなど中国海軍としてかなり力の入った実弾演習だったということだと思います。

それから、その翌年、2011年の8月ぐらいですけれども、これだけではないですけれども、代表的なものとしてご紹介すると、いわゆる島嶼奪還演習というものを南シナ海でやっております。中国側も自衛隊がそれをやったと言って非難していますが、彼らもしっかりやっているわけです。

これも彼らが配信した写真ですけれども、ユージャオ級という強襲揚陸艦と言うんですか、このホバークラフト2隻が入って、このホバークラフトで兵員を運んで、敵が支配しているところに上陸していくと、そういう演習です。しかも海上だけではなくて、ヘリコプターも利用したいわゆる空海一体作戦、立体的な作戦というのをやっているわけです。

こういったものを普通のシビリアンの私でも理解できるように説明してくれるというのが最近の人民解放軍の特徴の1つとして、いわゆる演習というものの対外的というか、相手に対する抑止効果というのを狙って、かなりこういう動きを進めてきているというのが新しい変化なのかというふうに思います。

いずれにしても、東シナ海だけでなく、南シナ海でより明確に、中国はパラミリタリー、それから海軍というものを使って、プレゼンスを高めているということだと思います。

では、何でそうなってきたのかということをお話したいと思っております。一番最初に話したように、そもそも中国共産党が、人民解放軍に対して与えたミッションというものの中に、今お話ししてきたものが非常に強く関わっているということはお話していただいていると思うんですが、さらにもうちょっとくたいてというか、特に南シナ海に関して若干私の見るところの理由というのを簡単にお話したいと思います。

1つには、一番最初、青山先生のお話の中でもありましたけれども、やはり資源の問題

というのは非常に大きな要因の1つだと思います。海洋権益、これを確保しなければいけないという意識が、非常に中国の政府関係者だけではなくて、社会においても高まっていると思います。

中国の経済発展を今後も安定的に継続させていこうとすれば、1つは海洋に関係する経済活動というのが、今後も発展していく大きなポテンシャルを持っているということもあるし、当然、資源の確保も重要になってくるわけです。中国側は、なかなか我々から見るとわからないところもあるのですが、実は中国側の意識としては、自分たちは南シナ海での資源開発に非常に遅れていると。自分たちの石油を東南アジア諸国が勝手に掘っている、我々は「論争棚上、共同開発」という協調的な政策を示しているにもかかわらず、東南アジア諸国は、それを利用して、勝手に開発を進めて年間五千万トン、中国最大の陸上油田である大慶油田と同じだけの石油を盗み取っているんだという意識です。これはおそらく彼らの共通認識です。こういった認識に基づいて、今の行動が出てきているということは、私は理解しておく必要があるんだろうと思います。

それから、太田先生のお話にもあったように、海上交通路という観点からもやはりこの海域は非常に重要になってきていると思います。

これは、アメリカの報告書をそのまま持ってきたのですが、中国の経済が発展するためには、貿易に大きく依存しなければいけないということをご理解いただけたと思いますけれども、中国の対外貿易の価格ベースで90%が海運に頼っているわけです。エネルギーということでいうと輸入する原油の80パーセントがマラッカ海峡を通過して、そして南シナ海を通過して中国に至るといって、このシーレーンを通っているわけです。

この安定の確保というのは、中国にとってますます重要な国家利益になっているというわけです。しかもベトナムとかマレーシアとかが潜水艦を持ち始めて、それを増強し始めている。中国側から見れば、東南アジア諸国は、この海域における海軍力を増強している。それは長期的に見れば、中国のシーレーンを脅かしかねないということを考えているわけで、それに対抗するという意識もある。どっちが先かという問題は別にして、彼らの認識としては、そういう懸念があるということです。

それから最後、これは、赤星海幕長の話にもあったように、もう1つ非常に重要なのは、この海域というのは、中国の対米戦略上ますます重要な意味を持ち始めているというのが大きなポイントだと思いますし、安全保障というか、軍事安全保障という観点から言うと、おそらくこれが一番重要な背景にあるのだと思います。

2009年3月に、「インペッカブル」という米海軍の音響観測艦というんですか、日本語でいうと、何をするのかという、潜水艦や海底の地形等々の情報をソナーを引いて、得るといってそういう役割を担っているんです。この船が、これも太田先生の話にも若干出てきましたけれども、海南島の南方沖、このあたりで通常のオペレーションをしていたところ、海軍の情報収集船、それから海監の船1隻、漁政の船1隻、そしてこの写真にあるような漁船2隻によって、その航行が妨害されるという事件が起こったのです。

アメリカ側の基本的な立場というのは、いわゆる領海、12海里以外のところにおいて、外国の海軍や空軍の行動というのは自由であると、それがアメリカの言うところの航行の

自由というものの考え方ですけれども、それに基づけば、こんなところで妨害されるのは、国際法違反だということで強く抗議したわけですが、中国側は何を言ったのかというと、この「インペッカブル」は、中国のEEZの中で中国の許可を得ずに行動をしたと、これは国際法と中国の法律に違反するんだということで、いわゆるEEZにおける航行の自由というものに対する見解の違いというものに基づいて、この「インペッカブル」の行動を物理的に妨害したということです。

これがどういうインパクトというか意味があるのかということですが、私の理解するところ、やはりアメリカの、中国の高まるA2/AD能力というものに対する、そこを改めて認識させたと、そういう大きな、そのプラスの意味はないんですけど、画期的な事件だったんだろうと思います。

この写真、先ほど太田先生のところでもありましたけど、繰り返す必要はないので、この海南島の基地が、いわゆる原子力潜水艦、戦略原潜と攻撃型原潜その双方の活動の自由度を非常に高める大きな意味があるということだと思えます。

だからこそ、先ほどのような海域で米軍は、「インペッカブル」等々を使って中国の潜水艦の動きに非常に敏感に監視していた。それに対して物理的な妨害があったということで、中国に対するアメリカの、ある意味この先わかりませんが、もしかしたらかなり決定的な疑いというのを抱かせる事件だったんだろうと思います。

いずれにしても、なぜアメリカがそこまで懸念するのかといえば、何度もでてきているように、A2/AD能力というものの高まりに直接的につながるからということです。

これは、普通の地図を90度左に傾けた地図ですけれども、いわゆる第一列島線というものと第二列島線、ここの間において、いざというときに米海軍の接近をいかに遅らせるのかというのが基本的な中国のいわゆるA2/ADの要諦だと思うんですけど、その際において非常に大きな役割を發揮するのが潜水艦ということです。

このグーグルの地図が海底の深さを表してくれるということで、中国側から見ると、いわゆる第一列島線を越えて西太平洋に進出する主なルートというのは2つあり、宮古海峡とバシー海峡というものになると思います。

ただ、この海峡、何が決定的に中国にとって違うのかというと、中国のこれまでの潜水艦、主なものはこの基地、青島にいたんです。青島から出て行って、宮古海峡を通過して西太平洋に出ようと思うと、非常に浅い、長い海域、浅くて長いところを航行して行って、ようやくここにきて深く潜っていわゆる潜水艦の本領を發揮することができるというわけです。中国の潜水艦から見ると、この浅い海域をずっと航行していくというのは非常にリスクです。米軍や海上自衛隊によって発見されるリスクが非常に高いわけです。

他方で海南島の南方沖はどうなっているのか。見ていただくとすぐわかるように、ちょっと行けばすぐ深い海が始まるんです。しかも先ほどの写真にあったように海南島の基地を出港した時点を悟られなければ、米海軍や海上自衛隊に追い回されるまで時間を稼ぐことができるということで、非常に潜水艦のオペレーションという観点からいうと、海南島、そしてその先の南シナ海というのがきわめて重大な戦略的利益が、A2/AD能力の向上を狙う中国にとってあるということです。

その観点から言って1つおもしろい行動というのがこの5月、中国海軍の艦艇が、ほぼ同時期に2カ所から第一列島線を通過して、グアムあたりに進出した演習がありました。

1つは、最初は大隅海峡を通ったのですが、台湾の北側を通って、進出してここで演習を行う。そして、帰りは宮古海峡を通って行った。

もう1つはほぼ同時期に、バシー海峡を通って同じ海域まで行って、訓練して帰って行ったという様な訓練を行っていますけれども、まさにこれが、今中国が海軍を中心に能力を持ちたいと思っているその将来像を暗示したような演習なのだろうと思います。

それから最後に若干補足なのですが、A2/AAD能力というのは、1つには海軍、特に潜水艦、原子力潜水艦が大きな役割を果たすのですが、もう1つよく話題になっているのが対艦弾道ミサイルです。ASBMといわれるものもその一翼を担っているということだと思います。これはちょっと手前味噌ですけど、今年の安全保障レポートの中に我々が業者に頼んで作ってもらった図なんですけれども、中距離弾道ミサイルを最終部分で誘導することによって、敵の艦船に直撃もしくは活動に重大な支障をきたすようなダメージを与えると、そういうミサイルですけれども、アメリカ側はこれに対して非常に強い懸念を持っているし、アメリカ側は既に中国は対艦弾道ミサイルに関して初期運用能力を持ったと考えていますので、こういったものによって中国は、アメリカに対して、いわゆるA2/AAD能力を高めることを狙っているということだと思います。

最後に、そういった中国の動きというものの、それから、それにアメリカがどう反応、対応していくのかというようなことについて、若干私の考えているところをお話したいと思います。

中国の海洋進出の強化というのは、今まで縷々お話してきたことを前提にすれば、やはり今後も続いて行くはずだと思います。そもそも主権の問題が絡んでいるということですし、何度もお話しているように彼らが守らなければならないと思っている新たな利益というのが、この海洋に集中しているからということだと思います。

さらに米軍に対するA2/AAD能力を高めるためにも、海洋が決定的に重要になってきているということで、この傾向は続くだろうと思います。他方で、そういった中国側の動きに対して警戒を強めたアメリカは、いわゆる「Pivot to Asia」とか、「リバランス」と言われるような形で、最近よく議論されていますけれども、やはりこの中国の動きに対して自分たちのプレゼンスを強化していく、そういう方向に今後行くのだろうと思います。

1つの方法としては、同盟国との関係を強化することで、当然日本との協力強化、その重要な一翼を担うのが海上自衛隊と米海軍との協力の深化ということだと思います。さらには、アメリカは、同盟国ではないけれども、利害を共有するパートナー諸国、たとえば、インドだとか、フィリピンだとか、ベトナムだとか、シンガポールだとか、そういった国々との協力の強化も進めて行くだろうと思います。

ではその2つの流れがぶつかった時に、南シナ海というのはどういう場になるのかという点ですが、可能性としては、やはり、今そして今後、南シナ海においてアメリカと中国の戦略的利益のぶつかり合いが継続していくのだろうと私は思います。



中国にとっての核心的利益というものと、アメリカにとっての航行の自由というものに象徴される国益、この2つのぶつかり合いというのが、今まさにこの南シナ海で起こっているのだらうと思います。

ただ、では米中新冷戦というものになるのかと言われると、他にもいろいろ考えなければならぬ要因がある。あえて1つだけ言いますが、経済面ということであれば、アメリカと中国だけではなく、日本と中国、その他の東アジア諸国と中国との間の共通利益が、実は大きく拡大している部分もありますので、今までの話だけをもって将来を云々するというのは私は間違いだと思いますけれども、今まで申し上げたような事実もあるということをお話したかったというのが私の今日の目的であります。

最後に、そういった中国側の基本的な考え方が変わらなければ、今我々が南シナ海で見ているような中国の強硬な対応というのは、遅かれ早かれ、東シナ海でも見られるということ念頭に置いて、我々は準備をしなければならないのだらうと思います。

先ほど、質疑の時間を取ると申し上げましたが、非常に申し訳ないのですが、目一杯しゃべってしまいました。申し訳ないのですが、これで私のお話を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

#### 【司会】

どうもありがとうございました。

今、先生からお話がありましたとおり、ボリュームのあるお話を45分で押さえていただくとうと、質疑の時間もとっていただくと思っておりましたが、残念ながら後の予定もございまして、質疑の時間は、省略させていただきます。

この後すぐ、5時から第3部を始めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。もう一度、先生に拍手をお願いします。

(休憩)

#### 【司会】

5時になりました。

お席をたたれてまだお戻りでない方もおられますが、時間となりましたので、セミナーの第3部「安全保障と人づくり」を始めさせていただきます。

この第3部におきましては、これまでとはやや角度を変えた視点から、安全保障の意義をお話いただこうと考えております。

講師は、前海上自衛隊中央システム通信隊司令で、昨年海上自衛隊を退官され、現在大阪府立狭山高等学校長をお務めの竹本三保先生です。

先生のご経歴を紹介させていただきます。

先生は、京都府のご出身で、奈良女子大学を卒業され、海上自衛隊に入隊されました。入隊後は、海上幕僚監部指揮通信保全班長、兵庫地方連絡部募集課長、舞鶴システム通信隊司令、システム通信隊群司令部幕僚、呉システム通信隊司令、青森地方協力本部長、中

央システム通信隊司令の要職を歴任されました。

昨年末に1等海佐で退官されましたが、大阪府立高等学校長の公募に応じられ、本年4月に大阪府立狭山高等学校長に就任され、現在に至っておられます。

このように、先生は女性幹部海上自衛官のパイオニアとして様々な困難を克服して、部隊指揮官など数々の重要な任務に就かれ、退官後の現在は、一般教育現場の責任者の道に進まれるという、非常に注目に値するご活躍をなさっておいでです。

本日は「海上防衛の中枢から人づくりの現場へ」と題してご講演をいただきます。

安全保障も、結局、それを支える人があって成し遂げられるものです。

竹本先生ご自身、「国防」と「教育」を二本柱に据えて、長く海上防衛の中枢で女性幹部自衛官としてご活躍されてこられました。

さまざまな困難との出会いと克服、また、そのご経験を学校長としてどのように活かしておられるのか、なぜ公立高校の学校長を目指されたのかなど、大変興味深い、貴重なお話をお聞かせいただけたと思います。

それでは、竹本先生、よろしく申し上げます。

#### 【前海上自衛隊中央システム通信隊司令 竹本三保氏】

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、元海上自衛官で、今、大阪府立狭山高校の学校長をやっております竹本です。よろしくお願ひいたします。

実は今日お話をするという事で、結構早くから頼まれたんです。校長になる前に「どうでしょう」という話を聞きまして、「なんで私がやるんですか」とお聞きしたところ、「自衛官から学校長に行く人はめったにいないんで、なんでそんな選択をしたのか本当に不思議なんだ」ということで、「その謎解きをやってください」というふうに言われました。それと、頼まれた時に、私、3月に「任務完了」という本を書いたんですが、それを読まれた上で頼まれたので、それなら、お話ししようかと思った次第です。

今日は1時からセミナーが続いて、皆様お疲れだと思いますけど、私の話は堅い話ではないので、ゆったりと聞いていただければいいかというふうに思っています。知っている方もおられると思って、さっきから見ているんですけど。ご存じの方、来ていただきましてどうもありがとうございます。

それでは、今日、こういうタイトルになりましたけど、「海上防衛の中枢から人づくりの現場へ」ってすごいおこがましいです。全然海上防衛の中枢にいたというわけではないんですけど、現在人づくりの現場にいるのは間違いないということでお話を始めさせていただきます。

いっぱい周りに写真をつけていますけど、36枚。あとで写真も拡大してお見せします。まず、私、33年間海上自衛官をやってきましたけれども、総括してこんな感じという話をさせていただきます。

海上防衛の中枢と言いますけれども、私は通信幹部だったのでシステム通信の中枢には居たという感じで見てください。通信関係の仕事が約3分の2ありました。その就いた順番に数字が書いてあります。ベースになった部隊、システム通信の部隊、そして「一隅を

照らす」というのは地方で勤務した時の話ということでまとめるとこんな感じになるんです。女性幹部としては結構珍しいと思いますけれども、青字で書いた部分は全部部隊指揮官ですので、部隊指揮官をこれだけさせてもらった女性自衛官はたぶんいないだろうと思います。今回「国防と教育」ということなんですけど、ベースになった部隊としては、最初に2つの教育関係の部隊を経験しています。そして通信の部隊に行き、システムの部隊に行きということで、あとシステム通信の中核ということで、海上幕僚監部のどういうわけか全部、防衛部の勤務です。だからといってそんな防衛の本当に中核というわけではありませんが、通信課、防衛課、指揮通信課ということで、他の例えば、人事、教育、総務、装備、そういうところはやっていません。全部防衛部で、中心部分におらせてもらったのかと思います。それと、これは艦隊の一番総本山になりますが自衛艦隊司令部とか、航空部隊の司令部の幕僚をやらせていただきました。もちろん通信部隊もやらせていただき、最後は中央システム通信隊司令もやらせていただいたということで、システム通信の中核はさせていただいたかと思います。

「一隅を照らす」という意味では、厚木の航空通信隊長が部隊指揮官としては初めてだったんです。その後、舞鶴、呉のシステム通信隊司令もさせていただきまし、兵庫、ここが一番近いですね、兵庫の地方連絡部募集課長もやらせていただいて、その経験が元になったと思うんですが、青森地方協力本部長をやらせていただいたということで、非常に好奇心が満たされる配置というか、非常にやりがいがあったと思います。

では、そのさわりを、写真を使って見ていただこうと思います。これ、どこかご存じでしょうか。皆さんご存じですね。江田島の幹部候補生学校の赤レンガの写真です。ここに入りたくて8年待ちました。というのは、14歳の時に「自衛隊に入りたい」と思ったんですが、女性が入れる制度がなかったんです。高校を卒業するとき防衛大学にも行けないし、海上自衛隊は女性を採っていなかった、そのときは。陸上自衛隊とナースはあったんですけど。それで、8年待って入ることができました。ここは近くにある古鷹山という山に登った時の話です。

当時、女性は全然カリキュラムが違って、男性と同じ授業ではなかったんです。これは鹿屋の航空実習に行った時の写真です。これは卒業式の時の写真で、一番手前で小銃がついで歩いていますが、行進をして卒業をするんです。その後、遠洋練習航海というのがあるんですが、今はもちろん女性も行きますけど、その当時は女性が行けなかった。ということで、男性社会に入ってその当時は女性はなんか期待されてなかったのかなという時代でした。卒業式が終わって候補生学校の校長に何て言われたかということ、1年間一生懸命訓練してきたにもかかわらず、「君たちはいいお嫁さんになるんだから」なんて言われて、もう、がくっとみんなですべていたのを思い出します。そういう時代でした。今から35年ぐらい前です。最初に勤務したのが横須賀教育隊なんですけど、こんなイメージです。カッター訓練、高校を卒業した隊員に対して教育にあたるのが主なんですけど、陸上みたいな真似事をしたこともあります。これは私は写っていない写真ですけど、中央観閲式の小隊長であるとか、中隊長であるとか、指揮官をやったことがあります。

55年、大平さんが総理の時に小隊長をやって、鈴木善幸さんが総理の時に中隊長とし

て、朝霞で中央観閲式の指揮官としてパレードをしたのを覚えています。ずいぶん昔の話です。私の尊敬する中曽根さんの前で歩きたいと思っていましたが、なかなか仕事の関係でそれはできなかつたです。中曽根さんと会えたのは、「しらね」という船の艦上で観艦式の日士官室を出てこられた中曽根さんに「ごくろうさん」と声をかけられたのを覚えています。その時すでに70いくつだったと思いますが、眼光が鋭くて素晴らしい方だと思いました。

これは専門の課程を身につけるといふことで、専門通信の課程に入ったんですけれども、そのときの市ヶ谷研修の写真で、ご存じの方はわかるかもしれませんが、これはもう何十年も前なので、鉄塔も100mですし、今は市ヶ谷に防衛省が移ってきていますからもっと近代的になっていますけど、これは昔です。ですから、このバルコニーは三島由紀夫が割腹自殺をしたバルコニーそのものの写真で、貴重な写真だと思っています。これはどこかわかりますか。潜水艦の中です。これもいろいろありまして、昭和63年の7月22日の写真。なんでそんなこと言うかという、23日には「なだしお」事故があった。記憶にある方おられると思いますけれども、本当は23日に乗る予定だったんですけど、23日は自衛艦隊司令部で当直があたっていたから、前日に乗ってこいと言われて乗った時の写真で、当日だったらえらいことになったと。なんで女が乗っているんだとそれこそ大騒ぎになったのではないかと思います。当日は当直としてちょっと大変でした。

そういうエピソードが全部ここ（著書「任務完了」）に載っています。何回もいいますが、次にこれはどこかおわかりでしょうか。ハワイです。「CINCPAC FLEET」という、太平洋艦隊司令部。あるミッションを帯びて行った時にそこで知り合った人たちと撮ったものです。「リムパック」という訓練がありまして、その訓練でハワイに出かけたんです。1990年の「90リムパック」という時から初めて韓国が参加しました。それまでは韓国は参加してなかったんです。これは韓国のサプライオフィサーと撮った写真です。このあたりから、オペレーションに関することがいろいろとからんできて、大きな仕事を任せられ秘密裏にそういうことをやっていたという時もありました。

これは、航空集団、航空部隊で勤務したときのことで、いろいろ写真ありますけど、これはパイロットスーツを着てパイロットみたいな格好していますけど、でも、これパイロット席ではないんです。これP2Jという所でノーズの部分があって、海上の監視をするためにここに乗るんです。これはマーカスという南鳥島というところに行ったときの写真だったと思うんですが、ノーリターンポイントといって、ある点を越えともう絶対戻れない、燃料が足りなくなるからとそういう思いもしましたけれども、その時の写真です。

これ誰かわかります。あんまりわからないですか。さぶちゃんです、北島三郎さんの20年ぐらい前の写真で、みんな20年前ですから若いんですけど、何でこんなところにいるかという、厚木の航空集団司令部を経由して硫黄島に行く前なんです。硫黄島は隊員が3ヶ月から4ヶ月間缶詰になり、なかなか休暇で戻れないためにさぶちゃんに慰問に来てもらったという、その途中で厚木に寄られた時の写真です。

あとこれは、護衛艦にへりで降りたりしたんですけど、夜になって女は泊められないから、船に女は乗せられないから出ていけと言われてた時のイメージ写真。その時の写真では

ないですけど。これは娘が大きくなって「お母さんの職場見よう」と言って来てくれた時の写真です。

これは、NSA、アメリカ国家安全保障局。皆さん、CIAとか、FBIとか、ご存じだと思いますけど、もう1つ大きな組織で情報機関の組織があり、そこに行った時に暗号学校という別の建物のところで勉強したということがあります。これは皆さんご存じのペンタゴンです。これは絵はがきから取っているんできれいに写っていますけど。こういう綺麗な状態の時にも行きましたけど、9.11が起こって、その半年後ぐらいに行った時には、このペンタゴン、五角形で5層になっているんですけど、この3層目まで突っ込んだ跡がまだ残っていましたけれども。その時は本当にセキュリティも厳しく、こういうポインターなんか空港で取り上げられるというような感じの厳重さでした。この写真はどこかという板門店、38度線のところに会議場があるんですけど、その真ん中を越えたらこっち北側だと言って、北朝鮮に渡ったとか言ってはしゃいで。これ人形ではなくて人間です、北朝鮮の兵士です。「アンニョンハセヨ」とか言って、冗談言っても全然びくともしませんでした。鍛えられているなというような気がしました。これは小泉総理の時の観艦式の様子ですが、普通の観艦式、乗られた方もいると思いますけど、観閲官のグループ、受閲のグループが行き交うのが日本の観艦式です。この時は国際観艦式と言いまして、何カ国もの船がそんなことやったら大変なことが起こるだろうということで、船を東京湾にずっと泊めて、その間を観閲官が縫うようにして観閲した時の話です。

こんなふうに、国外に出て仕事もやってきましたけど、私は実は語学は全然だめで本当に苦労しました。

これは青森のねぶたです。自衛隊を定年したら東北四大祭を見に行きたいと思っていたんですけど、まさか現役で青森に行って、しかもこんなふうに先頭を歩くなんで思ってもみませんでしたけど。青森で2年ちょっと、震災を経験したので少し延びましたが、青森で勤務した時の話です。これは八戸という航空部隊なんですけど、ソマリア沖・アデン湾の海賊対処にP-3Cが行ってます。そこの任務を終えて帰ってきた人たちを迎えているところです。これは今日みたいにこんな感じで講話を頼まれることが多かったので、その時の様子です。

これは「何の写真だろう」と思われると思いますが、実はこれはNHK「のど自慢」の落選記念写真と呼んでいるんですけど。それは何かというと、地方協力本部の仕事は募集とか、いろいろありますけど、広報も大きな仕事です。もちろん国民保護であるとか、自治体との調整とかあるんですけど、広報の一環として一番いいのはNHKの「のど自慢」に出ることだと。制服を着て。しかも地方協力本部というのは陸・海・空自衛隊があります。事務官もいる。「みんなが出て歌えばいい」と言って1回目出た時には、いやその前に「出よう」と言ったらもうみんな、ずるずるずるずるずるとひいて行くのがわかりました。嫌だったと思います、最初。でも「絶対効果ある」と言ったら、納得してやろうかという話になって。1回目は予選に出ました。そこで知恵ついたんです。予選会は、必ずその地方で放映されるんです。ですから、この辺で出るからと人に言えるんです。それで、知恵がついたもんですから、翌年は、「あ」で始まる歌にしよう。それで、もう全

国はいいのではないかと、地方で見てもらおうということで「青い森のメッセージ」という県民の歌にすることにしたんです。ところが予期せぬことが起こりまして、予選会に行けずに抽選落ちしてしまい、残念だからといって記念撮影したんです。思惑どおりにはいきませんでしたけど、PR効果はあるのではないかと今でも確信しています。

これは青森でいろいろと真面目な活動の方です。国民保護訓練の図上演習の時の様子です。これは防災訓練の時です。ちなみにここ写っているのは青森県知事です。もともと吉本に入りたかったそうなんです。いつも冗談ばかり言っている人でしたけれども。ここは、予備自衛官とか即応予備自衛官の招集訓練があって、その時に話している写真なんです。

東日本大震災が起こりまして、実際青森からは最大の数の即応予備自衛官を送り込みました。実は震災が起こる1年前からハイチに行っている部隊、ソマリアに行っている部隊、ジブチに行っている部隊があるということで、青森県の陸・海・空部隊は沢山あるんですが、普段よりは少なくなってしまうので、「もし何かあったら皆さんの出番です」と随分言っていたんです、即応予備自衛官の人にも、予備自衛官の人にも。

もっとすごかったのは、即応予備自衛官の人たちというのは年間30日の訓練をするんですが、ほとんどが民間企業に所属しておられるので、事前に「こういうことがあったら招集に応じられますか」というようなアンケートとか、いろんな問題点を聞く等の招集訓練をしていました。そうしたら、本当に起こってしましまして、訓練どおりのことをやって、安否確認をしてから招集するというので、結構大変でしたけど。やっぱり訓練しておいて良かった、そんなことが起こるとまさか思っていなかったけれども、本当にいろいろ言っておいて良かったと思いました。

これは、震災の時に良く見られた映像でしょうけど。これは即応予備自衛官を送り出した時の写真です。これは、私の当時の部下の家の写真です。八戸でも8mの津波が来ましたが、訓練が行き届いていたので、犠牲者は少なくて済んだんですが、被害はやっぱりかなりありました。これは、海上自衛隊の音楽隊が慰問演奏をやっているところです。

これは完全に私事なんですけど、何でこの写真出したかという、子供ができ、なかなか預かってもらうところもなく、当時は24時間の保育所とかないんです。それで主人の実家の内孫だからということで主人の実家の親がみてくれましたけど。その時にこの写真を拡大して、大きく大きく拡大して、「いつもこれがお父さん、これがお母さん、これがともちゃんと言ってください」と親に頼んで、いつもいつも言ってもらって、忘れ去られずに済んだのかと、3年ぐらい、そういうのがありました。

これは、私の娘は1人しかいないんですけど、私をお母さんと呼んでくれる娘がもう1人いまして、オーストラリアの高校生だったんですけど、ホストファミリーをしていたとき、部屋の中に2段ベッドと机を入れて、1年間預かりました。その次の年には「自分も行く」と、「自分も苦勞しに行く」と言って、行ってくれたので、家族のためにはなったのかなとは思っています。随分長く写真でしゃべってしまいましたが、いよいよ本題にうつろうと思います。

私の場合、「二度にわたる異文化との出会い」ということですが、大学を出て自衛隊に入りましたが、自衛隊はピラミッド型の階級社会です。民間企業も大体ピラミッド型にな

っているとは思いますが、それまで生きていた世界とはちょっと違って、ここの中で徹底的に鍛えられました。私は最大でも120人ぐらいの部下しか持つことがないのですが、やっぱり1000人からの部下を持っている人に言わせると、上から順番に7層ぐらい下りてくると、下には全然言っていることが届いていない、減衰するそうです。7割ぐらいしか伝わらない。1層目で7割、2層目で7割といったら、 $7 \times 7 = 49$ で半分の人しか理解していないんだというようなことを言われていた人がいますけど、7層までいくと、はるかに10%を切ってしまうと。なかなか意図は伝わらないのかも知れませんが、でも自衛隊は命令と言えればみんな聞きますから、とてもいい世界だと思っています。今いる世界は「なべぶた型組織」と呼んでいいと思います。学校長と教頭が管理職、あとは全部平等な平です。ですから、一斉に言えば聞いてくれますけど、でも誰か抜けていると、この人に言っても隣に伝わることは絶対ない組織です。学校というのは個人商店の集まりなんです。それはひしひしと感じています。今、私の学校には60名ぐらい先生方がおられて、各教科にわかれてということなんですけど。生徒は970名ちょっといますので、規模にしたら大体一個連隊ぐらいです。初めてこれだけたくさんの部下とは言いませんけど、責任者になったんだという気はしています。命令という言葉もありませんし、任務という言葉を使ったら教頭から怒られるんです。「任務という言葉は使いません。せいぜい職務にしてください」と言われています。とにかく組織自体も全然違います。

「二度にわたる異文化との出会い」の2番目ということで、私は今、府立高校にいますけど、公立の学校の経験がなくて女子校にいました。しかも、大学も女子大に行ったんです。そこから入った世界が男性社会ということで、男女同数のところなんて行ったことないんです。男性社会に入って、女性の割合は最初は1%ぐらいだったと思いますが、今でも5%しかいないんです。もう少し拡大していきたいという感じはしますけれども。

先ほど話したピラミッド型社会です。「伝統墨守、唯我独尊」。これはすでに聞かれたかもしれませんが、海上自衛隊を揶揄するような時に使う海軍の伝統です。唯我独尊、都合の悪いとき、船ですから、海に出ていってしまうのかという気がしますが。

陸上自衛隊は陸にいないといけないので、唯我独尊はできないと思います。陸上自衛隊は「頑迷固陋、動脈硬化」というそうです。なんとなく、そう言うそうです。

航空自衛隊は「勇猛果敢、支離滅裂」と言うんです。何となく雰囲気です。そういう中におりました。自衛官は宣誓します。宣誓文の中にある一番のキーワード、「事に臨んでは危険を顧みず」と、こういうことでやってまいりました。そして「一糸乱れず」です。もう統制取って。入隊して1週間も経たないうちに、見違えるように気をつけができ、敬礼ができ、休めができてというふうになるので、入隊式に来られたご両親は泣いて喜ばれています、そういう所であるということです。

一方、学校の場合は、初めての男女平等社会に行ったと思いました。学生も半々で、先生うちの学校は4割近くが女性です。半分いるところもあるそうです、高校でも。男女平等がいいのか悪いのかは別として、そういう社会です。

民間人校長の面接試験を受けに行ったんですが、9人の面接官がおられ、それもびっくりしましたが、そのうちの4人が女性だったので、「平等社会なんだな」と思っていま

した。たまたまその時は教育委員会に女性が多かったそうなんですけど。今年はたぶんそうではないだろうという話がありました。

組織的にはなべぶた型だと。特に感じたんですが、大阪府は人権教育ということをしごくうたっているところで、研修の3ヶ月間の中でしごくそれを強く感じました。府立高校、高校の方は統廃合というようなことで、過去5年ぐらい前ですか、かなり統廃合されましたが、増えている学校もあります。それは支援学校です。支援学校はここ2、3年で3校ぐらい新たに建てるという話があって、それだけニーズが高まっている。そういう方たちが表に出て、権利を求めてというようなところだと思うんですけども、人権教育は極端に言うと大阪府の特徴だと思います。いろんな分野があると思いますけど。

この学校のキーワードは、やはり「生徒のためになりますか」ということだと思います。先生のためになる学校になったら困ると思うのです。先生たちが楽するとか、そういうことではいけないでしょう。言ってきたことが本当に生徒のためになりますかというのを基準にしていつも言うようにしています。

例えば、この間の職員会議で言いましたが、「生徒たちが塾に行く、こりゃけしからん」と言うけれど、その前に自習室があるのに自習室は何時まで開けているのという話をしたわけです。5時に閉めているんです。それではだめです。でも勤務時間5時までだから、それ以上のことは私も言えないわけです。自主的に「自分たちが当番決めて残るから、自習室何時まで開けます」と言ってくれないかと期待しているんですけど。

私がお話をするとみんな静かにされていますので、わかってはおられるわけです、こうすべきと。

でも、基準は、「生徒のためになりますか」ということをいつも返すようにしています。それともう1つ、自衛隊は「一糸乱れず」でしたが、「教員は雑木林であれ」という言葉を覚えました。つまり、子供たちもいろんな子たちがいる、だから、先生もいろんな人がいていいということをみんな言っておりました。これを比較すると、とてもまだ他にもいっぱい違うところがあるんですけど、代表的にこういうふうなものを挙げました。

学校は、アポイントメントを取らずに突然偉い人がやって来るところで、びっくりすることがあります。あと移動する時には自転車を使っています。車は一切ありません。今日は車でお迎えに来ていただいて、久しぶりに自衛隊に戻ったような気がしました。それが、一般と比べてどうかという話がありますが、随分違うと思っています。ただ1つだけ自衛隊と学校で共通していることがあるんです。

おわかりでしょうか。やっぱり塀の中なんです。

自衛隊もそれではいけないと、どんどんPRもしています。でも、普段警察とか消防に比べて、国民の目には触れないです。触れないところで仕事をしているわけです。今回震災があつて、かなりクローズアップされましたが、そうではない。学校も実はそうなんです。塀もフェンスもあります、先生方も気持ちは中に向いています。地域との連携とかで出て行くことはもちろんあるんですけど。この区切られた中で生徒たちと一緒にやっついこうみたいなどころがあつて。もっと「学校はこうですよ」ということをオープンにしていけないと、みんな「学校どうなっているんだろうか」という疑問が残るのではないかと



思っています、一生懸命それを言っているところです。やっぱりそれは民間から来たというか、外から来た私の役目なのかなということで、「塀の中から出ましょう」という話をしているところです。

これまで私の経験から言って、人づくりの現場にこれまでで役に立つこと、どんなことやってきたらと思うた時に、自衛隊の中では人づくりの経験ということで最初の2つの配置がありました。中枢での話、そして、各級指揮官、指揮官を5回もやらせていただきましたけど、その中でやっぱりいろんなことが身についたというか今役立っていると思っています。

配置されたところは何をやるべきかという任務分析をまずやるということとか、目標を設定するという。そして、指揮命令というのは簡単ですけど、それでは本当は人はついてこない。やっぱり、「この人のためならやるか、仕方がないからやるか」みたいな統率力というのは必要かと思えます。

あとやっぱり大きいのはカウンセリングです。人の話をよく傾聴、聞くということです。先生が60人いると、60人面談するのはものすごく大変だったんですけど。2ヶ月以上かかりました。1コマ1コマあててなんです。普通20分ぐらいですが、「先生方の話を聞こう」と思って一生懸命聞きました。話す商売なので、しゃべるの大好きです、先生方は。いっぱいいろいろと言ってもらって、「すっきりしました」とか言って帰って行く先生もいましたけど。そういうことも大事なのかと思っています。

あと、PTA活動ということで、PTAの役員は、やらなくてはいけないからやったんです。自分でそんな手上げてやるほど時間もなかった。やらなくてはいけないからやったんですけど。娘が小学校2年生の時に単身赴任していたので、3年になって戻って来た時に「やります」と言ったら、担任の先生が「まだ早いのではないですか」と言ってくれたのに、「今やらないといつできるかわかりませんから」とやったんですけど。ところが、6年生になった時に「クラスで2人だけ2回やってもらう人がでる」ということで抽選にあたってしまって結局2回やったんです。なんか損した感じがしましたけど。

あとはやっぱり力を入れていたのは自主共同学童保育という、自分たちで指導員を雇って、いろいろ計画を立ててやっていく活動。ここの中で、ダウン症の子も来ていまして、そういう子供たちとの関わりとか、いろいろ経験をしたことがあります。学生時代にはもう本当に卒論と教育実習だけは、必死になってやったというか、とても熱くなった思いがありまして、大学の附属高校に行って教育実習をしました。今でも、その時の生徒から手紙が来るんです。だから、熱くなっていたのが伝わったのかとは思っていますけど。その子も先生になっているので、また会えたらいいと思っています。塾とか家庭教師とか頼まれてやったこともありますし、大学時代にYMCAのボランティアリーダーをやっていたんです。これは、地域との関わりが大事だと思ったからやったんですが。4歳年下の弟がいるんですけど、いつも怒られていたんです。何がと言ったら、「お姉ちゃんは国のことばかり言っているけど、京都のことを考えたことあるんか、城陽市のことを考えたことあるんか」ともう厳しく言われて、「こりゃいかん」と思って地域活動を始めました。やっぱり言われないと私にはその頃はわからなかったです。弟は地域の学校に行っていました。

私は市内の私立の学校に行っていたので、地域のことをあんまり見てなかった反省でそういう活動もしました。こういうことが今から思えばちょっとは関係があるのかというふうに思います。

「なぜ民間人校長を目指したか」ということなんですけれども、私は14歳の時から自衛官になりたいと思っていました。でも18歳で行ける制度がなかったんです。海上自衛官になりたかったけど、海上自衛官にはなれなかったんです、制度がなかったのです。それで、大学に行って、本当にこれでいいんだろうかと考えながら、やはりその時思ったのは、大事だったのは、やっぱり国防と教育。これが日本にとって一番大事な二本柱だというふうにその時から思っていたんです。

でもやっぱり海上自衛隊に入りたい。入って33年過ぎました。殉職することもなく、「あ一定年がくるな」と思った時に、まだ50代ですから、なんかまたやらなくてはいけないと思った時に「これは教育だな」と思ったんです。だから私の中では、2つの大事なことの1つをやった。もうそれが終わらなくてはいけない。だから、もう1つの大事な教育なんだと思ひまして、日本の将来を担う若者を育てたいという思いはずっと持っていたので、その熱い思いで教育の分野を志しました。

いろんな分野があると思います、教育でも。でもやっぱり最初は苦労して現場から入らないといけないと思ったんです。自衛隊の中でもゼロから出発したことが何回かあるんです。だから、50半ばを過ぎていますが、またゼロからやれば何かが見えてくるかと思って挑戦したんです。

試験に受かると思っていませんでしたけど、採っていただけたので、しっかり、3年間の任期なんですけど、やりたいと思っています。第二の人生もアイデアとチャレンジで何とかやっていけるのではないかと。抵抗勢力はとても大きいです。

よくご存じだと思いますけど。「組合です」とか言いながら、いつもは授業やっているのに、夜になったら訪ねてくる集団がいたりとか、いろいろあります。相手も人ですので、話せば絶対わかると思いますし、ざっくばらんに、自分はこう思うんだという話をしていけば、お互いにどっかで歩み寄れるのではないかと私は思っています。

狭山高校というのは、どんなところだろうかと。大阪狭山市というとても小さな市です。人口は6万弱です。でも日本最古の狭山池という大きなため池があるので、皆さんご存じだと思います。あの狭山池を活用しなくてはいけないというふうに思っています。狭山って、漢字で書くと狭山高校のイメージがちょっと違うなど。私、最近ひらがなを多用しているんです。「さわやかに、やさしく、まもり育てる、さやま高校」というふうに。一度生徒を見てください。そういうイメージの子供たちがいっぱいいますので。

うれしかったのは、この「さやまグローバル」。グローバルというのは、グローバルとローカルを合わせた言葉なんですけれども、「さやまグローバル」というタイトルで、ある予算要求をしたんです。

ついこの間、教育委員会で校長プレゼンをやって予算をつけてもらいました。「狭山高校変わってくるな」と先生方が思ってくれたらいいと思っています。やはり何か変えていかないと、良くなっていくっていう実感がないと、みんな動き始めないと思うので。そ

れが徐々にできてくるかなというふうに思っています。

具体的に1つ例を挙げますと、5月の末にネイティブの英語の先生が来られたんです。「イングリッシュランチをやります」ということでお弁当持ち寄って、その時間だけは英語しか使ってはだめというような感じで、誰でも来てくださいという感じで始めたりしています。

「さやまスタンダード」というのは、やっぱり大事なものはマナー教育というか、躰だと思えます。「躰」という言葉を最初から出したらみんな抵抗あるだろうと思って、まだ大きな声では言っていませんが、さやまはこういうふうにかっちりとした指導をしていきたいんだという話を「さやまスタンダード」という言葉で実施していこうと思っています。

そして先生方のチームを「チームさやま」に、いつ頃なるかわかりませんが、していきたいと思っています。

これまで、私、自衛隊は四字熟語が多いですが、そういう漢字ばかりの世界でしたけど、最近ひらがなの多いのが心地よくなってきて、今、人づくりのキーワードというのを集めているところです。「寄り添う」、「生徒に寄り添う、向き合う」、「生徒の目線に立つ」、「ほめる、声をかける」、「見守る、包み込む」、「『怒る』のではなく『叱る』」、「ホスピタリティー」とか。こういう優しい言葉がだんだん似合ってきたかなと勝手に思っています。こういう感覚を持ちつつ、これから元自衛官ということのを忘れずに、今後は取り組んでいきたいと思っています。

これで終わります。ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

司 会： どうもありがとうございました。まだ先生、お時間が5分ほどございますので、質問を受けさせていただいてよろしいでしょうか。先生に何か聞かれないとご希望の方おられましたら、挙手をお願いいたします。

来場者： どうもご講義ありがとうございました。大阪府議会議員の岩谷と申します。先生とは初めてですが、よろしくお願ひします。まさに先生がおっしゃったなべぶた型組織、一番規律の厳しい防衛省・自衛隊という組織から、ある意味で生徒ではなくて先生の側ですが、規律の緩い府立高校というところに来ていただいたわけですがけれども、先生側の規律をきちっとしていく、そして組織をピラミッド型にしていくために、どういったことが必要なのちよっと教えていただきたいと思ひます。

竹本氏： 今言われた先生を規律で縛ってというようなイメージのことを、管理職が、上から強制すると反発が出ます。ですから、そういう上から目線というか、それはちよっと難しいのかと思ひんです。私が今やっているのは、いろんな人がいていいんだと。でも、最低限やるべきことはやりましようから始めなくてはいけないと思ひているんですけど、その組織づくりです。いろんな項目ごとに、生徒指導するなら生徒指導、進学指導なら進学指導、いろんな部分がありますけど。そのチームを使ってやっていくという感じなんです。自衛隊のように上から言って「はい、はい」なんていう人は1人もいないんです。だから、その発想を変えないと

ちょっと難しいかなと。

だから、私も全然違う世界だと思いながら、でもなんでこうなっているのだろうの研究からずっとやっているのです。でも、私の姿を見て、ちょっと違うと思ってくれるように、ちょっと時間かかると思いますけど。実績を積み上げて「この先生の言うことちょっと聞いてみようかな」という気持ちにさせることから始めています。ちょっと時間かかりますけれども。

来場者： ありがとうございます。私、維新の会所属なんですけど、みんな先生のこと応援していますので、よろしくをお願いします。

竹本氏： ありがとうございます。狭山高校の同窓会長はお仲間の古川さんです。

司 会： では、よろしいでしょうか。

来場者： すみません。貴重なご講話ありがとうございました。私、彼女の後輩なんですけど、海上自衛隊で京都の募集課長の白井と申します。今のご質問に重なるかもしれないんですが、先ほど言われていた高校でやられている「チームさやま」と。チームというのは、やっぱりチームワークというか、それをやってく上で、何が一番大きなポイントというか、キーワードで言われていたかもしれないんですが、その「チームさやま」というのをやっていく上で一番先生が重視されていることというのは何でしょうか。

竹本氏： まだ、全体がチームにはなっていないんです。だから、部分的なチームづくりをやっているんです。具体的に言うと、若手を集めた、若手をとったって、うちの学校平均年齢53歳なんです。30代は1人だけ。20代が3人いるんですけど。そういう構造なので、でも20代、30代プラス非常勤講師を入れると7人ぐらいの20代、30代がいますので、それでまず何かやろうかというチームを1個つくっているのと、さやまプロジェクトと言って、委員会とか、分掌という言葉も聞き慣れないと思いますけど、それとはまた別の特別なことを検討するチームをつくりましょうと言って、そういうチームも作っているんです。それは誰でも入れる。ただし、「誰でも入れるから来ませんか」と言って来る人は誰もいません。「来ない？来ない？」とこうやって呼び集めて、さあやろうかみたいな世界なんです。そういう地道なところからやるしかないのかなと。そんな簡単に「チームさやま」とか言ってできないと思っています。答えになっていないと思いますけども。

来場者： どうもありがとうございました。

司 会： それでは時間になりました。竹本先生、どうもありがとうございました。

竹本氏： ありがとうございます。

#### 【司会】

それでは、時間になりました、竹本先生ありがとうございました。

以上をもちまして、本日の講演はすべて終了いたしました。

それでは、本セミナーの閉会にあたりまして、近畿中部防衛局次長・辻秀夫からご挨拶

申し上げます。

#### 【近畿中部防衛局次長挨拶】

近畿中部防衛局次長の辻でございます。主催者を代表しまして閉会にあたりご挨拶を申し上げます。本日は、大変大勢の皆さま方、熱心にご聴講いただきましてありがとうございます。

今回、第1回関西総合防衛セミナー、関西一円の各界、各方面にご活躍の幅広い皆様方、また、関西在住、在勤の大勢の皆様方に身近に安全保障問題について、学びそして考えてもらう機会を提供しようということで企てた試みではございますけれども、そういうことから、本日は大変暑い中、また、平日の午後と、こういう時間帯に、しかも5時間にわたりまして、多彩なプログラムを用意いたしまして、はたして、どのくらいのお客様がお見えになるかということにつきましては、いささか心配もございましたけれども、こうやってお忙しい中大勢の皆様方にお越しいただきまして本当に心から感謝を申し上げたいと思います。

また、これも、本日、ご講演の青山先生始め、赤星先生、太田先生、飯田先生、そして、今ご講演いただきました竹本先生、各先生の熱心な熱のこもったご講演、充実したご講演と、それから皆様方の熱心なご聴講ということのおかげであるというふうに思っております。

先生方、ご来場の皆様方、そして、開催にあたりご協力いただきました、後援をいただきました、関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会各位の皆様方に改めて深く御礼を申し上げます。

私ども近畿中部防衛局は、今後とも、防衛省・自衛隊の活動、あるいは、安全保障に関する取り組み、施策につきまして、関西管内の方々の深いご理解をいただくために広報活動に力を入れてまいり所存でございますので、どうぞ、引き続きご声援を賜ればよろしくお願ひしたいと思います。

本日は、本当に大勢のお客様にお越しいただきまして、また、先生には、ご熱心にご講演いただきましてありがとうございます。皆様方の今後ますますのご健勝を祈念申し上げますとともに、私どもの施策に対して引き続きご理解、ご協力、また、ご鞭撻、ご叱声を賜らんことをお願い申し上げます。

本日はどうもありがとうございました。

#### 【司会】

以上で、近畿中部防衛局主催、第1回関西総合防衛セミナーを閉会とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。お忘れ物のないようにお帰りください。

それと、アンケート用紙にご記入の上、出口近くの回収箱、または係員にお渡しいただけたら幸いです。

なお、この会場は、18時で閉館となります。時間が後5分ほどしかございません。誠

に申し訳ございませんが、速やかにご退場の程、よろしくお願い申し上げます。